牧羊神

金尾文淵堂發行

牧羊神

文學博士　上田敏遺稿

牧羊神

宋詩選
今日教授稿

牧羊神

上田敏遺稿

牧羊神

上田敏遺稿

目次

牧羊神　一
汽車に乘りて　二九
ちやるめら　三六
蹈繪　四二
啄木　五〇
× × ×

トリスタン・コルビエル　TRISTAN CORBIÈRE

蟾蜍　LE CRAPAUD　五六

ジュウル・ラフオルグ JULES LAFORGUE

お月様の悲歎ぶし COMPLAINTE DE CETTE BONNE LUNE 六〇

月 光 CLAIR DE LUNE 六六

ピエロオの詞 LOCUTIONS DES PIÉRROTS 七二

月の出前の對話 DIALOGUE AVANT LE LEVER DELA LUNE 七六

冬が來る L'HIVER QUI VIENT 八二

日 曜 DIMANCHES (LE CIEL PLEUT……) 九〇

日 曜 日 DIMANCHES (LE DIMANCHE ON SE RLAIT……) 一〇二

モリス・メエテルリンク MAURICE MAETERLINCK

溫 室 SERRE CHAUDE 一一〇

祈 禱 ORAISON 一一四

愁のむら SERRE D'ENNUI 一一七

こころ AME 一二〇

病 院 HÔPITAL 一二七

燒 玉 VERRE ARDENT 一三四

めつき REGARDS 一三八

エミイル・ヴエルハアレン EMILE VERHAEREN

都會 LA VILLE 一四七
思想 LA PENSÉE 一六四
世界 LE MONDE 一八六
俊傑 LES ÊLITES 二〇〇
フエルナン・グレヒ FERNAND GREGH
われは生きたり JE VIS 二一〇
ポオル・フオオル PAUL FORT
兩替橋 PONT AU CHANGE 二二一
この乙女 CETTE FILLE, ELLE EST MORTE 二二一
別離 L'ADIEU 二二二

小歌 BALLADE 二二七
ギイ・シアルル・クロオ GUY CHAREES CROS
窓にもたれて LA FENÊTRE 二三一
譫語 DÉLIRF 二三五
レミ・ド・グルモン REMY DE GOURMONT
髮 LES CHEUVEUX 二四八
雪 LA NEIGE 二五二
柊冬青 LE HOUX 二五六
薔薇連禱 LITANIES DES ROSES 二六〇
むかしの花 FLEURS DE JADIS 二六一

立木の物語　LITS DES ARBRES　竹友藻風
× × ×　與謝野寛
跋
「牧羊神」の後に

故文學博士　上田敏氏肖像

立木の物語　LIFES DES ARBRES
× × ×
跋
「牧羊神」の後に
付友　漢
與謝野寛

文學博士　土田杏村　省

牧羊神

阜の上の森陰に直立ちて
牧羊の神パアン笙を吹く。

晝さがり日暖かに、風も吹きやみぬ。
天青し、雲白し、野山影短き

音無の世に、たゞ笙の聲、
ちよう、りよう、ふりよう、
ひうやりやに、ひやるろ、
あら、よい、ふりよう、るり、
ひよう、ふりよう、
蘆笛の管の簧、
震ひ響きていづる音に、
神も昔をおもふらむ。

髯そゝげたる相好は、
翁さびたる咲まひがほ、
角さへみゆる額髪、
髪はらゝぎて、さばらかに、
風雅の心浮べたる
——耳も山羊、脚も山羊——
半獣の姿ぞなつかしき。

音の程らひの搖曳に、
憧れごっち夢に入るを
きけば昔の戀がたり、
「細谷川の丸木橋、
ふみかへしては、かへしては、
あの山みるにおもひだす、
わかさ心のはやりぎに
森の女神のシュリンクス

追ひしその日の雄詰を。
岩の峽間の白樫の
枝かきわけてラウラ木や
ミュルトスの森すぎゆけば、
木蔦の蔓に絡まるゝ
山葡萄こそうるさけれ。
去年の落栗毬栗は
蹄の割に挾まれど、

君を思へば正體無しや、
岩角、木株、細流を
踏みしめ、飛びこえ、徒わたり、
雲の御髪や、白妙の
肌理こまやかの肉置の
肩を抱めむと喘ぎゆく。
やがてぞ谷は極まりて。
鳶尾草の濃紫

にほひすみれのしぼ鹿子、
春山祇の來て遊ぶ
泉のもとにつきぬれば
胸もとゞろに、かの君を
今こそ終に得てしかど
思ふ心のそらだのめ。
淺澤水の中島に
仆れてつかむ蘆の根よ。

あまりに物のはかなさに、
空手をしめて、よゝと泣く
吐息ためいきこめあへず、
愁ひ嘯くをりしもあれ、
ふしぎや、音のしみじみと、
うつろ蘆莖鳴りいでぬ、
蘆莖響き鳴りいでぬ。
さては抱けるこの草は

君が心のやどり草
戀は草、草は戀。
せめてはこれぞわが物と
笙にしつらひ、年來の
つもる思を口うつし
移して吹けば片岡に
夫呼ぶ雉子の雌鳥も、
胡桃に耽ける友鳥も、

原ににれがむ黄牛も、
牧に嘶く黒駒も、
埒にむれゐる小羊も、
聞惚れ、見惚れ、あこがれて、
蟬の連節のごやかに、
蜥蜴も石に眠るなる
世は寂寥の眞晝時、
蘆に變りしわが戀と

おのれも、いつか、ひとつなる
うつら心や、のんやほ、のんやほ、
常春藤のいつまでも
うれし愁にまぎれむと、
けふも日影の長閑さに、
心をこめて吹き吹けば、
つもる思も口うつし、
あゝ蘆の笛、蘆の笙の笛。

日はやゝに傾きて、遠里に
靄はたち、中空の溫もりに、
草の香のいや高き片岡、
夢薫り、現は匂ふ今、
眠眼の牧羊神、笙を吹きやみぬ。
森陰に音もなし。

村雨ははらゝほろ、
山梨の枝にかゝれば、
けんけんほろゝうつ
雉子の鳴く音に覺まされて、
磐床いづる牧羊の神パアン、
胸毛の露をはらひつゝ
延欠して仰ぎ見れば、
有無雲の中天を

ひとり寂しく鶴の鳥、
遠の柴山かけて飛ふ。
かへりみすれば、川添の
根白柳を濡燕、
掠め飛び交ふ雨あがり、
今、夕影のしるけきに、
生のこの世の忙しさよ、
地には蟻のいとなみを、

空には蜂の分封を
つくづく見れば、宿命の
かたき掟ぞいちじるき。
水の面に映りたる
おのが姿に戀じにの
玉玲瓏の水仙花、
花は散りてし葉の上を、
蟻は斜に、まじくらに

——なに營のすさびなる——
生の力に驅られたり、
またある時は糧運ぶ
いそしき業のもなかにも。
蟻塚近き砂の上、
二疋の蟻の足とめて、
なに語りあふ、たゆたへる
遇ふさ離るさのみち惑、

蟲の世界のまつりごと、
健氣にも、はた傷ましや。
空は今何の反橋ぞ、
天馳使わたらすか、
東の山に虹かゝり、
更に黃金の一帶の
霓わたせるけしきにて、
鹿とり靡く弓雄等が

鳴鏑射放つ音たてゝ、
蜂の巣立の子別に
父蜂さそふ細工蜂、
七歩ばかりの後より、
やゝ高く飛ぶ女王蜂、
たとへば修羅の巷にて、
亂飛、亂廻、虎走、
勇猛たぐひ無き兵も、

パアンふと脅しぬれば
人崩つきて、人馬落ちかさなり、
惑ひ、ふためき走るごと、
大騷亂のわたましや、
生の力の仕業なる。
遙に山のあなたには、
人の築きし城のうち、
國富み榮え、民繁き

都はあれど、ものみなは
かたみにつらき犠牲の
鬪のさだめを免れあへず、
青人草の細工蜂、
黄泉の坂路のさかしきに、
こはに磐石押し上ぐる
シシュフォス王の姿かな。
種とり蜂のふところ手、

夢の浮世のぬめり男の、
しやらりし、やらりとしたる身も、
子別過ぎし初秋の
朝の命を知らざるや、
イクシオオンのたえまなく、
車輪に廻るあはれさよ
それにひきかへ王蜂の
満ち足らひたる幸は

こよなき物と見えながら
ウラノスはクロノスに、クロノスは
其子ジウスに滅され、
ジウスの代さへ危きを
プロメエチウスは知るといふ
流轉の世こそ悲しけれ。
噫勢力の強くとも
命の掟になに克たむ。

理を知る心深ければ
悲さらに深まさる。
慰はたゞこの笙の笛、
牧羊神の笛の音に、
世の秘事ぞかくれたる。
名に負ふパアン吹く笛の音に、
この天地のものみなは、
擧りて群れゐふくまれて、

身も世も忘れ、處、時の
辨別も無き醉心地、
夢見る心地誘ふなる
不思議の笙の笛の聲、
悠やかに、朗かに、あんら、緩やかに、
森の泉に來て歎く
谷の八十隈吹き靡け、

人里遠く傳はれば、
牧人笻を擲ちて、
羊踊をひとをどり、
生の悅みちわたる
面にしばし夕づく日、
耀ふみれば宿命の
羈絆はいつか解かれたり。
をちこち山の影長く、

夕の空の艶なるに
なほも笛吹く牧羊神。
雲の湊の漁火か、
ちろり、ちろりと、長庚は
朝が散らせるよき物を、
羊を、山羊を集むるか、
母の乳房に髫髪兒を
呼びかへすなるひとつ星

あゝ二つ星、三つ星と
數添ふ空の縹色、
深まさり行く夕まぐれ、
羊の鈴の音も絶えて、
いづこの野邊の花垣か、
燕の妹、雉子の叔母、
舌を絶たれし弟姫の
あの容鳥の歌の聲、

間無く繁鳴く恨さへ、
和らぎたりや、この夕。
こゝにパアンも今はとて、
さらばの音取、末長く、
「さらば明日參らう。
うえうちり、たちえろ」
白樺木立わけ入れば
東の阜に月はのぼりぬ

滊車に乘りて

赤松の林をあとに、
麻畠ひだりにみつゝ、
滊車はいま堤にかゝる。
ほのかなる水のにほひに、
河淀の近きは著るし。

三稜草生ふる河原に
葦切はけゝしと噪ぎ、
鵠こそ夏は來らね、
たまたまに百舌の速贄、
箆鷺の何をか思ふ
しよんぼりと立てる畷に、
紡績の宿にやあらむ、

きり、はたり、はたり、ちやうちやう、
筬の音やゝにへだゝり、
道祖神祭るあたりの
鐵道の踏切近く、
繩帶の襤褸の衣、
勝色は飾磨の染の
乳呑子を負へる少女は
淺茅生の末黑に立ちて

萬歲と囃し送りぬ。

萬歲はなれにこそあれ、
幾年を生きよ、里の子。
人の世に尊きものは
土の香ぞ、國の御魂ぞ。
僞の市に住へば
產土の神に離りて

養をかきたる人も、
埴安の鄕の土より
生ぬきのなれに呼ばれて
本然の命にかへる。

道芝の上吹く風よ、
農人の寢覺に通ふ
微かなる土のおとづれ、

なつかしき母の聲音か。
晝さがり草の香高く
松脂のにほひもまじる
地の胸の乳房のかをり
蘇門答剌の香も及ばじ。

忽ちに鐵のにほひす。
鳴神の落ちかゝるごと、

滊車は今、橋に轟く。
桁搆眼路をかぎりて、
ひとり見る蛇籠の礫。

ちやるめら

薄日のかげも衰へて、
風冷やかに雲低き
鈍色空のゆふまぐれ、
はづれの辻のかたすみに、
ちやらめらの聲吹きおこる。

はじめの節のゆるやかに
心を誘ふ管の聲、
音は華やげるしらべかと
おもへば、あらず、せきあぐる
悲哀の曲の搖曳に、

みそらかけりて、あの山越えて、

越えてゆかまし夢の里。
よしや、わざくれ、身はうつし世の
榮にまぎるゝことがめびこと、
有爲の奥山、路嶮し。

響はるかに鳴りわたる
おほまが時のうすあかり、
飴屋の笛にそゞろげる

子供心もおのづから
家路をおもふ二の聲に

夢の浮橋、あら、なつかしや
戀ひし、なつかし、虹の橋、
いつし、いづれの日に架けそめて、
涙の谷の中空を
雲につらぬるそり橋か。

細き金具の歌口に
かなしみあふれ氣も萎えて、
折りまはしたる聲のはて、
忽ちくづれ調かはる
あゝ、ちやらめらの末の曲。

「やぶれ菅笠、しめ緒が切れて

さらにきもせず、すてもせず。」
人に思のなまなかあれば、
夢に現を代へ難き
——えい、なんこせう——あだ心。

踏繪

眞鍮の角なる版に
ビルゼンの像あり、
諸〻の御弟子之を環る
母にてをとめ、
わが兒のむすめ、

歸命頂禮、サンタ・マリヤ。

これもまた眞鍮の版、
萬民にかはりて、
髑髏の阜にクルスを
負ふ猶太の君
那撒禮のイエス
キリストス、神の御子。

不思義なる御名にこそあれ、
イエス・キリストス、
かみのみこ、よの人のすくひ、
げにいきがみよ。
始なり、終なり。

繪踏せよ、轉べ、轉べと

糾問ぞ切なる。
いでや、この今日の試に
克ちおほせなば、
パライソに行き、
挫けたらむには、インヘルノ。

伴天連の師の宣はく
マルチルの功は

大惡の七つのモルタル
科を贖ふ。
プルガトリオを
まつしぐら、ゆけ。パライソへ。

大日本、朝日の國の
信者たち、努めよ
名にし負ふアンチクリストの

力を挫く
義軍の先驅、
上れ、主の如く磔刑に。

この標世に克つ標、
あらたかの標ぞ
ありし、ある、あらむ世をかけて
絶えず消えせぬ

命の光、
高くに仰げ、サンタ・クルスを。

見よ、かゝる殉教の士を。
天草は農人、
五島には鯨とる子も
ガリレヤ海の
海人の習と

悲節を守りつゞ。

代代に聞く名こそ異なれ。
神はなほこの世を
知らす、たゞひとりおぼつかな
今の求道者、
「識らざる神」の
證にと死する勇ありや。

啄木

婆羅門の作れる小田を食む鴉、
なく音の耳に慣れたるか、
おほをそ鳥の名にし負ふ
いつはり聲のだみ聲を
又無き歌とほめたつる

木兎、梟や椋鳥の
ともばやしこそ笑止なれ。

聞かずや春の山ぶみに、
林の奥ゆ、伐木の
丁々として山更に
なほも幽なる山彦を。
こはそも仙家の斧の音か、

よし足引の山姥が
めぐりめぐれる山めぐり、
輪廻の業の音づれか。

いなことよ、たゞの鳥なれど、
赤染色のはねばうし、
黒斑白斑の綾模様
紅梅、朽葉の色ゆりて、

なに思ふらむ啄木の
つくづくわたる歌の枝。

げに虚なる朽木の
幹にひそめるけら蟲は
風雅の森のそこなひぞ、
鉤けて食ひねてらつゝき、
また人の世の道なかば

TRISTAN CORBIÈRE. 1845—1875

LE CRAPAUD

闇路の林ゆきまよふ
惱の人を導きて
歡樂山にしるべせよ。
あゝ、あこがれのその歌よ、
そゞろぎわたり、胸に沁み
さもこそ似たれ、陸奥の
卒都の濱邊の呼子鳥、
なくなる聲のうごう、やすかた。

蟾蜍

風の無い晩に歌がきこえる……
——月は黑ずんだ青葉の
曲折に銀を被せてる。
……歌がきこえる、生埋になつた

木精がしら・そらあの石垣の下さ……
——已んだ・行つて見よう、そこだ、その陰だ。
——蟾蜍よっ・——なにも恐い事は無い・
こっちへお寄り、僕が附いてる、
よっく御覽、これは頭を圓めた、翼の無い詩人さ
溝の中の迦陵頻伽……あら厭だ。

……歌つてる——おゝ厭だ——なぜ厭なの。
そら、あの眼の光つてること……
おや冷して、石の下へ潜つてく。
さよなら——あの蟾蜍は僕だ。

JULES LAFORGUE 186—1887

COMPLAINTE DE CETTE BONNE LUNE.

CLAIR DE LUNE.

LOCUTIONS DES PIERROTS.

DIALOGUE AVANT LE LEVER DE LA LUNE.

L'HIVER QUI VIENT.

DIMANCHES (LE CIEL PLEUT.....)

DIMANCHES (LE DIMACHE, ON SE PLAÎT.....)

お月様のなげきぶし

星の聲

膝の上、
天道様の膝の上
踊るは、をどるは、
膝の上、

天道様の膝の上、
星の踊のひとをどり。

——もうし、もうしお月さま、
そんなに、つんとあそばすな
をどりの組へおいでなら、
金の頸環をまゐらせう

おや、まあ、いつそ難有い
思召だが、わたしには
お姉様のくだすつた
これ、このメダルで澤山よ。

——ふふん、地球なんざあ、いけ好ない、
ありやあ、思想の臺ですよ、
それよか、もつと歴とした

立派な星がたんとある。

——もう、もう、これで澤山よ、
おや、どこやらで聲がする。
——なに、そりや何かのきちがひ、
宇宙の含密が鳴るのでせう。
——口のわるい人たちだ、

わたしや、よつびて起きてて よ。
お引摺のお轉婆さん、
夜遊にでもいっこいで。

――こまつちやくれた尼っちよめ、
へへへのへ、のんだくれの御本尊、
掏摸や狗のお守番、
猫の戀のなかうど、

あばよ、さばよ。

衆星退場。靜寂と月光。遙に聲

はてしらぬ
空の天井のその下で
踊るは、をごるは
はてしらぬ
空の天井のその下で
星の踊をひとをごり。

月光

こてもあの星には住へないこ思ふこ。
まるで鳩尾でも、ごやされたやうだ。

ああ月は美しいな、あのしんこした中空を
夏八月の良夜に乗つきつて

帆柱なんぞはうつちやつて、ふらりふらり
と
轉けてゆく、雲のまつ黑けの崖下を。
ああ往つてみたいな、無暗に往つてみたい
な、
尊いあすこの水盤へ乗つてみたなら嘸よ

からう。

お月さまは盲だ、險難至極の燈臺だ。

哀れなる哉、イカルスが幾人も來ておつこちる。

自殺者の眼のやうに、死つてござるお月様、

吾等疲勞者大會の議長の席につきたまへ。

冷たい頭腦で遠慮無く散散貶して貰ひませう

とても癒らぬ官僚主義で、つるつる禿げた凡骨を。

これが最後の睡眠劑か、ごれひとつその丸薬を

ごうか世間の石頭へも頒けて呑ませてや
りたいものだ。

ドリヤ袍を甲斐甲斐しくも、きりりと羽織
つたお月さま、
愛の冷きつた世でござる、何卒箙の矢をと
つて、

よつぴき引いて、ひようと放ち、この世に住
ふ翅無の
人間ごもの心中に情の種を植ゑたまへ。
大洪水に洗はれて、さつぱりとしたお月さ
ま、
解熱の効あるその光、今夜ここへもさして
來て、

寢臺に一杯漲れよ、さるほどに小生も
この浮世から手を洗ふべく候。

ピエロオの詞

また本か。戀しいな、
氣障な奴等の居ないとこ、
錢やお辭義の無いところや、
無駄の議論の無いところが。

また一人ピエロオが
慢性孤獨病で死んだ。
見てくれは滑稽かつたが、
垢拔のした奴だつた。

神樣は退去になる、猪頭ばかり殘つてる。
ああ天下の事日日に非なりだ。
用もひとほり濟んだから、

どれひとつ「空扶持」にでもありつかう。

月の出前の對話

——そりやあ、眞の生活もしてはみたいさ、だがね、理想といふものは、あまり漠として　ゐる。

——そこが理想なんだ、理想の理想たる所だ。

譯が解るくらゐなら、別の名がつく

——しかし、何事も不確な世の中だ。哲學また哲學、

生れたり、刺違たり、まるで筋が立つてゐない。

——さうさ、眞こは生きるのだといふんだ
もの、
絶對なんざあ、たつ瀨があるまい。
——ひとつ旗を下して了はうか、えい
お荷物はすつかり虚無へ渡して了はう
——空から吹きおろす無邊の風の聲がい

ふ、
「おい、おい、ばかもい、加減にしなさい」
——もつとも、さうさな「可能」の工場の汽笛
は
「不可思議」のかたへ向つて唸つてはゐる。
——其間唯一歩だ。なるほど黎明と

曙のあはひのちがひほどである。

——それでは、かうかな、現實こは、少なくとも

「或物」に對して益があるといふことか。

——そこでかうなる、ねえ、さうぢやないか、薔薇の花は必要である——其必要に對し

てと。

——話が少し妙になつて來たね、すべては循環論法に入つてくる。

——循環はしてゐるが、これが凡べてだ。

——何だ、さうか、

なら、いつそ月の方へいつちまはう。

冬が來る

感情の封鎖。近東行の郵船……
ああ雨が降る、日が暮れる、
ああ木枯の聲……
萬聖節、降誕祭、やがて新年、
ああ霧雨の中に、煙突の林……

しかも工場の……

ごのベンチもみんな濡れてゐて、腰を下せない。

とても來年にならなければ徒目だ。

ごのベンチも濡れてゐる、霜枯の森の奥に、

トントン、トンテンと角笛はもう鳴つて了つた。

ああ、海峽の濱邊から驅けつけた雲のおか
げで、
前の日曜もまる潰れだつた。
霧雨が降つてる。
づぶ濡の木立にかけた蜘蛛の網は、
水玉の重みに弛むで毀れて了つた。
豊年祭のころに、

砂金の波の光を漂はせて、豪勢な景氣だつ
た日光は
今どこに隱れてゐる。
けふの夕方は、泣きだしさうな日が丘の上
の
金雀花の中で、外套を羽織つたまま、横向に
臥てゐる。
薄れた白つぽい日の目は、酒場の床に吐き

散らした痰のやうで、
黄いろい金雀花の敷藁を、
黄いろい秋の金雀花を照してる。
角笛は頻に呼んでる。
歸へれ……
歸へれと呼んでる
タイオオ、タイオオ、アラリ、
ああ悲しい、もう己めてくれ……

堪らなく悲しい……
日は丘の上に臥てゐて、頸筋から毟りとつ
た腺のやうだ、
日は慄へてゐる、孤ぼつちで……

さ、さ、アラリ
熟知の冬が來たぞ、來たぞ
ああ、街道の紆曲に、

「赤外套の兒」も見えない。
ああ此間通つた車の跡が、
ドン・キホオテ流に、途方も無い勇氣を出し
て、
總崩になつた雲の斥候隊の方へ上つてゆ
くと、
風はその雲を大西洋上の埒へと追ひたて
る。

急げ急げ。こんだこそ本當だ。
昨夜はよくも吹いたものだ
やあ滅茶苦茶だ、そら鳥の巣も花壇も。
ああわが心、わが眠、それ、斧の音が響く。
きのふまでは、まだ青葉の枝、
けふは、下生に枯葉の山、

大風に茅も葉も揉まれて、
一團に池へ行く。
或は獵の番舍の火に燒ばり
或は遠征隊の兵士が寢る
野戰病院用の蒲團に入るだらう。

冬だ、冬だ、霜枯時だ。
霜枯は幾基米突に亘る鬱憂を逞しうして

人つ子ひとり通らない街道の電線を腐蝕
してゐる。

角笛が、角笛が——悲しい……
角笛が悲しい……
消えて行く音色の變化、
調と音色の變化
トントン、トンテン、トントン……

角笛が、角笛が
北風に消えてゆく。

耳につく角笛の音、なんとまあ餘韻の深い
音だらう……
冬だ、冬だ。葡萄祭も、さらば、さらば……
天人のやうに辛抱づよく、長雨が降りだし
た。

おさらば、さらば葡萄祭、さらばよ花籠、
椽の葉陰の舞踏の庭のワットオぶりの花
籠よ。

今、中學の寄宿舍に咳嗽の音繁く、
暖爐に火は消えて煎藥が匂ひ、
肺炎が各區に流行して
大都會のあらゆる不幸一時に襲來する。

さりながい、毛織物、護謨、藥種店、物思、
塲末の町の屋根瓦の海に臨むで、
その岸とも謂つべき張出の欄干近い窓掛、
ランプ、版繒、茶、茶菓子、
樂はこれきりか知ら、
(ああ、まだある、それからピアノのほかに、
毎週一回新聞に出る
あの地味な、薄暗い不思議な

衛生統計表さ。)
いや、何しろ冬がやつて來た。地球が痴呆な
のさ。
ああ南風よ、南風よ、
「時」が編みあげたこの古靴を、きざきざにし
ておくれ、
冬だ、ああ厭な冬が來た。

毎年、毎年、
一々その報告を書いてみようとおもふ。

日曜

ハムレット——そちに娘があるか。
ポロウニヤス——はい、御座ります。
ハムレット——あまり外へ出すなよ。腹のあるのは結構だが、そちの娘の腹に何か出來ると大變だからな。

しとしと、無意味に雨が降る、雨が降る、
雨が降るぞや、川面に羊の番の小娘よ……
ごんたくの休日のけしき川に浮び、
上にも下にも、どこみても、艀も小船も出て
居ない。

夕がたのつとめの鐘が市で鳴る。
人氣の絶えたかしっぷち、薄ら寂しい河岸

っぷち。

いづこの塾の女生徒か（おおいたはしや）
大抵はもう、冬支度、マフを抱へて有つてる
に、

唯ひとり、毛の襟巻もマフも無く
鼠の服でしょんぼりと、足を引摺るいちら

しさ。

おやおや列を離れたぞ、變だな。

それ驅出した、これ、これ、ご、ご、どうしたんだ。

身を投げた、身を投げた。大變、大變、

ああ船が無い、しまつた救助犬も居ないの

か。

日が暮れる。向の揚場に火がついた。

悲しい悲しい火がついた。(尤もよくある書

割さ)

じめじめと川もびっしょりと濡れるほど

しとしとと譯も無く、無意味の雨が降る、雨

が降る。

日曜日

日曜日には、ゆかりある
阿嬭兒の名誦みあげて
數珠爪繰るを常とする。

オルフェエよ、若きオルフェエ
アルフェエ川の夕波に

轟きわたる踏歌の聲……
パルシファル、パルシファル、
おほ禍つびの城壁に
白妙清き旗じるし……

プロメテエ、プロメテエ、
不信心者の百代が

口傳にする合言葉……

ナビュコドノソル皇帝は
金の時代の荒御魂、
今なぼわれらを領するか……

さて、つぎに厄娃の女たち、
われらと同じ運命の

乳に育つた姉妹……

サロメ、サロメ、
戀のおほくが眠つてる
蘭麝に馨る石の唐櫃……

オフェリイ姫はなつかしや、
この夏の夜に來たまはば

人雑もせず語らはう……

サラムボオ、サラムボオ
墓塲の石にさしかゝる
清い暈きた月あかり……

おほがらの后メッサリイヌよ
紗の薄衣を搔きなでて、

足音ぬすむ豹の媚……

おお、いたいけなサンドリヨン、
蟋蟀も來ぬ爐のそばで、
裂れた靴下縫つてゐる……

またポオル、ヰルジニイ
殖民領の空のもと

さても似合の女夫雛……

プシケエよ、ふはり、ふはりこ
罪の燐火に燃えあがり、
消えはしまいか、氣にかかる……

MAURICE MAETERLINCK

SERRE CHAUDE

ORAISON

SERRE D'ENNUI

ÂME

HÔPITAL

VERRE ARDENT

REGARDS

温室

森の奥なる温室、
永久に鎖ざせるその戸、
その圓屋根の下にあるもの、
これに準へて、わが心の下にあるもの。

飢に惱む王女の思、
荒野に迷ふ船乘の愁
不治の患者の窓下に起る樂隊の音。
さていとも溫き隅に行きてみよ。
收獲時のある日に氣絶したる女ともいふ
べし。
病院の中庭に驛傳の馭者來り、
麋の狩人の成の果なる看護人、かなたを通

り過ぐ。

月影にすかし見よ。

（物皆こゝに處を得ず。）

法官の前に狂人立てりともいふべし、

軍ぶね、帆を張りて運河に浮び、

白百合に夜の鳥啼き、

眞晝がた、葬禮の鐘は鳴る、

（かの鐘形の玻璃器の下に。）

平原に病人の舍營あり、

晴れし日に依的兒匂ふ。

あな、あはれ、あな、あはれ、いつか雨ふらむ。

雪ふらむ、風ふかむ、溫室に。

祈禱

あはれみたまへ、もくろみの
戸にたたずめるうつけさを、
わがたましひは、しろたへの
無能に無爲にあをざめり。

業をやめたるたましひは
吐息に蒼きたましひは、
たゞ眺むらむ、疲れはて、
苔の花に震ふ手を。

かかりしほどにわが心、
紫紺の夢の玉を吹き、
蠟の纖手のたましひは

月の光をふりそゝぐ。

月の光に明日こいふ
黄花のさゆり透きみえて。
月の光に手の影は
ひとり悲しくあらはれぬ。

愁のむろ

胸にある青き愁よ、
さいはひを求めてやまず、
よよと泣く月の光に
夢青く力無けれど。

この青き愁の室に
さしよりて透見をすれば、
ぐらす戸の緑のあなた、
月を浴び、玻璃に覆はれ

生ひ繁げる葉もの、花もの、
夢の如く、不動に立ちて
霄よひは、忘我の影を

愛執の薔薇におとす。

水は、はた、ゆるく噴きいで、
薄曇る不斷の息に、
月影と空とをまぜて。
夢の如く節もかはらず。

こころ

わが心

ああげに蔽はれたるわが心かな。
わが願の羊群は溫室の内に在りて、
牧に暴風の來るを待つ。

まづ最も病めるものを訪はむ。
そはあやしき臭を放てり。
その中に入れば、われ母と共に戰場を過ぐ
る如し。
眞晝がた人人、一戰友を葬り
歩哨は時の食を喫す。
また最も弱きものを訪はむ。

そはあやしき汗を流したり。

こゝに新婦は病み

日曜に謀叛起り、

小兒、牢に引かる。

（その先、はるかに霧を隔てて、

厨の口に横はるは垂死の女か、

あるは不治の患者の床の下に野菜を切る

看護の尼か。

終に最も悲しきものを訪はむ。

（毒あるが故に、これを最後にしたり。）

ああ、わが唇は手負の接吻を受く。

この夏、城の妃は皆わが心の塔の内に餓死

したり。

今ここに曙の光、祭を照らし、

河岸づたひ羊の歩むを見る、
また病院の窓に帆あらはる。
胸より心へ行く道の遠さよ。
歩哨は悉く受持の地に死したり。
ひと日わが心の郊外に小やかなる祭ありき。

日曜の朝、人、失鳩答を苅入れたり。
天晴れたる斷食の日、尼寺の童貞は擧りて運河に船の行くを眺めたり
其時、白鳥は毒水の橋の下に惱みぬ。
囹圄の周なる樹樹の枝は伐りとられ、
六月の午後、人、藥水を齎し、
患者の食は眼路のかぎりに擴げられたり。

わが心よ。
萬物の悲しさ、ああ、わが心よ、ああ、萬物の悲
しさ。

病院

病院。運河の岸の病院。
夏七月の病院。
廣間には爐を焚きたり。
時しもあれや、運河の上、大西洋定期船の汽
笛の聲。

（ああ窓に近づく勿れ。）

移民宮殿を通拔す。

暴風雨の中に遊船一艘、

また他の船は悉く羊群を載せたり。

（窓はかたく閉ぢたるこそよけれ。

人人外より殆んど全く覆はれたり。）

雪の上なる温室の心地す。

暴風雨の日、産後の初詣ある如し。

夜具の上に草木の散りぼふがみえて、

日うららかなるに出火あり。

われ、負傷者に充ちたる森を通過す。

ああ今終に月はのぼりぬ。

廣間の中央よりは噴水迸り、

一群の少女ら戸を細目に開く
牧の島には羊の群
氷河の上に美美しき木立、
大理石造の玄關に百合の花。
人の通はぬ森の奥に祭あり。
氷の淵に東邦の本草は茂りたり。
聞け、今水門は開かる。

大西洋定期船は運河の水を搖り亂る。
ああ、されど看護の尼は爐を搔いたり
河添の道のかたへの蘆の葉は、綠涼しく生
ひにけり。
月の光に漂ふは手負載せたる船一艘、

王女は皆暴風雨の下の船に乘り、
あまたの姫は失鳩答の原に死したり。

ああ、この窓はゆめな開きそ
聞け、水天の際、大西洋定期船の汽笛の聲。

花苑に何者か毒害せらる。
敵がたに盛なる祭のけはひす。

包圍せられたる市街に鹿が放たれ、
花百合のなかに獸の檻は見ゆ。
炭鑛の底深く熱帶の植物茂り、
牝羊の一群、鐵橋を過ぎ、
牡の羊は悲しげに廣間をさして入り來りぬ。

看護の尼、いま燈を點じて

患者の食を運びつつ、
運河にのぞむ窓の戸を、
すべての門の戸を閉ぢて、月の光を隱した
り。

燧玉

悔といふ燧玉、手にとりて
過ぎし日を其下に照らしみれば、
内證のかくれたる色青き
底の上に、うるはしき花は浮ぶ。

その玉の照らしたるわが願、
その願つらぬけるわが心、
その心思出に近づけば、
忽ちに枯草はもえあがる。

このたびは思をこかの玉に
窺へば晶玉のつとひかり、
忘たる悲の花びらは、

ぼのぼのこおもむろに咲きにほふ。
記憶にはあこもなく消えはてし
ありし夜のことわざも歸り來て、
なよげなる毳をもて撫でらるる
新しき望あるわが心。

めつき

憐なる疲れたるこのめつき
汝等のめつき、わがめつき、
今は亡きめつき、今に來るべきめつき、
終に來ずして己むとも、實は世に在る目付。
日曜の日、貧者を訪ふ如きもあり

家無き病人の如きもあり。
白布に被はれたる牧に羊の迷ふが如きも
あり。
また類罕なる目付もあり、
圓天井の下、閉ぢたる廣間の内、童貞の刑に
就くを眺むる如きもあり。
何ともわかぬ悲を思はしむる目付あり。
即ち工場の窓に居る農民を、

機織となりし園丁を、
蠟人形の見世物の夏の晝過を、
庭に居る病人を見る女王の心を、
森の中なる樟腦の香を、
祭の日、塔に王女を押籠むるを、
水温き運河の上、七日七夜を舟にて行くを
思はしむ。

憐み給へ、收穫時の病人のやうに、小股にて
出て來る目付を。
憐み給へ、食事の時に迷兒となりしやうな
る目付を。
憐み給へ、外科醫を仰ぎ見る怪我人の目付
を
そのさま、暴風雨の下の天幕に似たり。
憐み給へ、誘惑せらるる處女の目付を。

（噫、乳の流は闇に逃げ入る、
白鳥は蛇の群のなかに死したり）
また憐み給へ、終に屈したる處女の目付を。
路無き沼に棄てられし王女の姿かな。
また暴風雨の中を照り輝ける諸船の眞帆
あげて遠ざかり行くが如き目付もあり。
また何處にか他に居る事能はずして苦む
目付あり、げに憐むに堪へたるかな

殆ど區別無く而も實は相異れる苦悶の目付。
何人も終にそれと曉り得ぬ目付。
殆ど無言なる目付、
また憐なる囁の目付、
押殺されたる憐の目付。
あるものの中に在れば、病院となりし古城

に居る心地す。

また他のものは尼寺の小さき芝生の上に百合の紋章打つたる天幕を張りたる如し

更に他のものは温室に收容したる負傷者の風ありて、

また更に他のものは病人無き大西洋定期船に乘組みたる看護の尼の姿あり。

噫すべてかゝる目付を眺め知り、

かゝる目付を受け入れて、

かゝる目付の應接におのが目付を費ひはて、

それより後は、わが眼をもまた閉ぢえざることは。

EMILE VERHAEREN

LA VILLE

LA PENSÉE

LE MONDE

LES ELITES

都會

路はみな都會にむかふ。

煤煙のおくのかた

かなた、階は階を重ね、

幅廣き大石段のかずかず、

絶頂の階までも、天までも上る往來の道と
なりて。
夢の如く都會は髣髴たり。

ふりさけみれば、
鐵材を網に組みたる橋梁の
虚空に躍りて架るあり。
石あり柱あり、

ゴルゴンの鬼面これを飾る。
郊外に聳ゆるは何の塔ぞ、
屋根あり、破風ありて、家屋の上に峙つは、
下摶つ鳥の皷翼に似たり。
即ちこれ觸手ある大都會、
屹然として
平野田園の盡くる所に立つ。

紅き光の
きらめくは
標柱の上、大圓柱の上、
晝なほ燃えて、
巨大なる黄金の卵子の如し。
天日こゝに見えず
光明の口にはあれど、
煤煙の奥に閉さる。

揮發の油瀝青の波は
石造の波止場木製の假橋を洗ひ
ゆききの船の鋭き汽笛、
霧の奥に恐怖を叫ぶ、
緑色の船の燈は、その眼、
大洋と虚空とを眺むらむ。

川岸は荷牛の轣轆に震ひ、
芥車、蝶番の如く軋り
鐵の權衡は角なる影を落して
忽ちこれを地下室の底に投ず。
鐵橋ありて、中央に割れて開けば、
帆檣の森に立つすさまじき絞臺の姿。
また中天に銅の文字、
長大にして屋根を越え、

壁を越え、軒蛇腹を越え、
對立して宛も戰場の觀あり。
かなたには馬車動き荷車過ぎ、
瀘車は走り、努力は飛ぶ、
皆停車場に向ふ。見よ金色の欄干、
處々に連りて泊てたる船の如し。
鐵路また枝線を續けて軌道地下に入り

隧道を、洞穴を潜行すれば、
忽ち歴々たる光明の網に變じて
沙塵と騒擾との中に現はる。
即ちこれ觸手ある大都會。

見よこの市街を――人波は大綱の如く
大厦高樓のめぐりに絡はるなか、
道は遠長く紆りて、見えつ隱れつ、

解し難くうち雑りたる群集の
手振狂はしく足並亂れ、
眼には憎の色を湛へて、
駈拔く「時」をやらじとばかり、齒にて引留む。
さるほどに朝より夕をかけて、夕暮が夜に
なりても、
騒擾と喧囂と憂愁の中にたち、
「偶發」の方にむかひて、人が播く勞作の辛苦

の種も
「時」すぐに奪ひて去るをいかにせむ。
ここに暗憺として薄暗き帳場
瞟眼にして疑の念深き事務室、
また銀行も狂亂大衆の風の音に、
はたと戸を閉づ。

戸外には天鵞絨のぬめりの光、

赤く曇りて襤褸布の燃ゆるが如く、
點燈の柱柱に退りゆく。
生活は酒精の波に醗酵せり。
人道にむかひて開く酒場こそは、
爭鬪爛醉の影を映す
鏡明るき殿堂ならすや。
壁に背をもたせつつ、
燃寸箱を賣る盲人もあり。

一つの穴に落ち合へる酒色と饑餓との民
もあり。
肉の惱の相尅が、
小路に跳りかつ消ゆる其聲黑し。
かくて怒號の叫つぎつぎに高まさりて
憤怒の聲、暴風となれば、
金色と燐光の快樂を追ふに、

眼も眩みてか、人皆は互に蹂みあふ。
近づくは女か、はた蒼顏の傀儡か、
異性の徵は髮の毛にのみ、めだちぬ。
かかる時、偶偶に煤けたる赤黑き空氣の幕
が、
日をさかり卷れあがれば、
光を仰ぐ大衆の
大叫喚の海潮音、

廣場に、旅館に、市場に、住居に、
こよもし呻る聲强く、
垂死の人も安じて、
今際の時を送り得ず。
晝既に斯の如きを——夕暮が
黑檀の槌をもて天空を彫りきざむ時、
をちかたの都會の光、平原を領する顏に、
巨大なる夜の間の望の如し。

そそりたつ此大都會、如法樂欲と光華と游
狎となり。
光明は闌干として天雲のあなたに流れ、
千萬の瓦斯の燈は金光の林の如く、
鐵路、軌道を投げて憚ることなく、
僞の幸福を追へば、
富貴と勢力とこれに伴ふ。
城壁のしるく見ゆるは大軍の屯するに似

て、
またもたちのぼる煤煙は、
田野を招く劉喨たる角の聲。

これ即ち觸手ある大都會。
貪婪の蛸に比すべし、骨堂なり、
威力ある屍なり。

かくて諸の路、ここよりして遙に
かの都會にむかふ。

思想

驕慢の都その宿命に驅らるる上を、
眼にはみえねども儼然として、
悲よりも高く、悅よりも高く
生生として思想は領す。

沈靜なる勢力と熱意との世のはじめ、
精神の炬火もえいでしよりこのかた、
人間の頭腦に入りまじりて、
黄金の迷宮に
これを包みしは思想、
光芒これが爲に更にまさりぬ。
かくて思想の力ますます強く、
人間の恐怖と熱望と批判とを統治し、

心情と生氣とを動かし、
有情と非情とを眺めて、
宛もその常に閉さざる眶の下、
無限の眼は開きたるに似たり。

かくて思想は廣大の物界に震動して、
大方の世界に火焔の環をめぐらせり、
いづれか、はじめの光なるを知らず。

されど天空に常見ゆるその金光を仰ぎみれば、
人は自己の光よりこれらを生みし事を忘れ、
さすがにこれらの光華に醉ひて、一日神を造りぬ。

けふもなほこの光、久遠に亘る如し、
されど之を養ふに力と美とを欠きたり。
常に靜まらず、ここしへに新なる
現實の血なくんば、久しくは保たじ、
われら今常に之を濺ぐ。
一世の思想家は其心ますます明にして精
なるべし。

生命の高貴なる工人として、
額は輝き、心は跳り、
新しき光もて忽ち頭腦を照せる
光明をこそ驅使すべく、
征服の途にその歩調ますます勇ましく、
悠久たる覆載のもと、人こそは至上なれと
ならむ。
はるに、

附記　本書の頁數が170から直ぐに186へ飛んで附いて居るのは、印刷の際の過失から起つた誤植です。本文は少しも脱落して居るので御座いませんから、御安心下さいまし。
（文淵堂主人）

けふもなほこの光、久遠に亘る如し、
されど之を養ふに力と美とを欠きたり。
常に靜まらず、ここしへに新なる
現實の血なくんば、久しくは保たじ、
われら今常に之を濺ぐ。

一世の思想家は其心ますます明にして精
なるべし。

生命の高貴なる工人として、
額は輝き、心は跳り、
新しき光もて忽ち頭腦を照せる
光明をこそ驅使すべく、
征服の途にその歩調ますます勇ましく、
悠久たる覆載のもと、人こそは至上なれと
自からの高貴なるに感ずるならむ。
廣遠にして豊富なる哉、めもはるに、
華さきわたる大思想よ。

世界

世界は星と人とより成る。

空高く、
ここしへに無聲なるいつの時より、
空高く、
奥深くして風荒るる天上のいづこの庭に、

空高く、
いづれの太陽を央にして、
ものに譬ふれば
火焔の蜂の巣をさながらに、
勢力彌漫したる虚空の大壯觀中、
幾千萬の不可思議にして壯烈なる
星の巣立は飛散す。

星ありき、何の世とは知らねど、蜜蜂の如く、
これら衆星をまき散しぬ。
これ今、金色の精氣の中、
花に、籬に、園生の上に飛びかひて、
夜は輝き、晝は隱るる
久遠の天の運行に、
往きつ、離りつ、はた戻りつ、ここしへに回轉

す、
母なる星のめぐりを。
嗚呼熾烈なる光明の狂へる如き大旋轉よ。
白色の大靜寂、これを領す。
うまれの火爐を中心に、狂ひつ、こごろきつ、
廻轉する金色の天體は、宇宙の則に從ふな
り。

嗚呼大法に從ひて、而も無邊なる大群飛よ。
焔の落葉か、燃え上る草むらか、
更に更に遠く進み、更に更に高く跳り、
發生し、死滅し、はた增殖して、
輝くもの、燃ゆるもの、
さながら似たり、
寶冠のおもてを飾る珠の光に。
かくて地球も其昔、いつとは知らず在天の

大寶冠より滴りたる夜光の玉のひとひかり。

緩漫にして遲鈍なる寒氣、鉛の色の濕りたる空氣は
この炎々として猛烈なる火氣を靜めて、
大洋の水、まづ其面を曇らせ、
山岳、つぎに其氷りたる脊椎を擡げ、

森林は底土の下より顫へて、
朱に染みて骨々しき猛獸の怒號、爭鬪に戰
き、
天災東より西へ流れて、
大陸は作られ、また滅びぬ。
かしこ、旋風の怒をなして渦卷く所、
狂瀾怒濤の上、岬は突きいでぬ。
突進し、震蕩し、顚覆する天地の苦鬪

漸くにして其狂亂を收むるや、
影と爭との幾千年後
徐ろに人は宇宙の鏡に顯はる。

彼はじめより主たり、
忽然として
其上半身を直立し、其額を上げ、
萬物の主たりと名乘る、かくて其祖より離

れぬ。

晝あり夜あるこの地球は
はるばるこ限なく
東西にひろがり、
はじめの思想の、はじめの飛躍、
人間の
至上なる腦の奥より
日の下にあらはれぬ。

嗚呼、思想よ、
恐ろしき飛躍なる哉、火焔の散らふに似たり、
其爭ふや赤く、其和するや綠に、
天上の星光、雲を破る如く
はてしらぬ原にかがやき、
火の如くなりて虚空に轉じ、

山を攀ぢ、川を照し、
新光明を隈なく放ちぬ、
海より海へと、靜寂の邦の上に。
されどこの金色の喧囂の中、
いつも空にある如く、今も空にある如き
大諧音の終に起らむを望みて、
さながら
日輪の如く

あらはれ、のぼるものは、
此世の民の中より出づる
天才なり。

火焔の心を有し、蜜の唇を有して、
天才は事も無げに、「道」を語りぬ。
苦悶の闇に迷ふ凡百のともがら、
皆この大思想の巣にかへり來て、

切なる求道、狂ほしき疑惑の
満干の波はひたせども、
此突如たる光明に影も停まりつ、
萬の物質に新しき震動は傳り、
水も、森も、山岳も、山風に、濱風に
身の輕きをおぼえて、
波自から跳り、枝自から飛びて、
白き泉の接吻に岩も動きぬ。

萬物其基よりして革りぬ。
眞と、善と、愛と、美と、醜と、
水火が作る微妙なる結合は
宇宙の精神の經緯となりて、
愛する物が織りなせる世のすべては
終に天上の則に從つて生く。
世界は星と人とより成る。

俊傑

「智慧」は山嶽の中腹に坐して、
山川の白波
左に折れ、
右に外れ、
谷間の岩を縫ひつ、絡ひつ、
流るるを見て、

分別らしき眼差に、不安の色を浮べたれど、
井然たる山下の村落に、
軛に繋がれたる牛馬の
列も亂さず、靜かに勞作に向ふを見ては、
「智慧」の腦中に築かれたる宮殿に、
炬火の焰、沈として、平安は復り來りぬ。
平靜なる山川の景に、何の變化も無し。

人もし仰いで高きを望まば、
智慧は徐ろに手を擧げて、
著るき山路を指すを知らむ。
唯ひとりかの炎々たる熱望を抱きて、
一たび昇るとも又更に高く昇らむとする
人、
かの金色の眩暈を避け難き人は、
其精神の聲のみを聞きて、毫も他を聞かず。

其大飛躍に足代となるものは喜悅なり、
危きを侵し、難きに就く沈痛の喜悅なり。
飄逸にして且活躍を好む其心は、
大風の黑き喇叭のいと微かなる音をだに
逸せず。
斯る人は人生の戰鬪を一の祝祭とす、
そこには人、群を成して行かず、ひとり行く

を悦ぶ。

眼もくらむ深雪の光、
白妙の劍が峰を被ふはふりぎぬ、
かじかむ指を嚙み、張りつむる胸を拷る
大風の擦子、極寒の萬力、
岩より岩へ轉ずる雪なだれ、
是等のものも終に止めえじ、
かの肅々として頑強に巓を極めむとする

歩を。

しかすがに樂しきは谷底の命かな。
人の姿、人の聲、
藺を席とし、日光を敷石としたる室、
砂石の甕、木づくりの古椅子。
週と日はすべて
勞作と辛苦との淺黑き數に暮しつ。

日曜のたび毎に
紅白の花をかざして、
朝には御堂の鐘の聲を聽く。
夕されば、少女の姿、つねよりも艶めきて、
口ふるれば、耻らひて身は竦めども、
かたくなに否むことに非らず、忽ちに諾なふ
もよし、

されど、かの絶壁の細道をたどりて
徐ろにのぼりゆく人々は、
喜悅に醉ひ、未來に醉ひ、
人里を思ひ出つる歌聲に耳をも假さず、
孤獨なるその振舞を世の人の顧みずとも
何かあらむ、
天に向ひ、無限に向ひ、今開く此戸よりして、
後の世は擧りて必らず續かむと、

わが夢の終をも問はず、
巓の金の照しと白雪と蹈み轟かし、
いや高き光を、空に仰ぎつつ、
築き上げたる熱望と意志との巖。

FÈRNAND GREGH

JE VIS.....

われは生きたり……

われは命の渦巻の中にあり……

弱し、顫へたり、蒼ざめたり、不安なり、苛苛し。

悔に、願に、祈に、

思出に、望に、欲に滿ちたり……

われとわが求むる所を知らず、

われとわが誰なるをも知らず、

散亂し、變化し、樣樣に分裂したるを感ず。

幸なるか、知らず、唯、

われは生きたり。

われは愛す、何とは無しに愛す。

われは戰慄す、魅られたる人の如くに恐る。

わが愛するは清き唇、香よき唇、

烟の如く纖やかに吹きまよふ丈長の髪、

珠ひとつ、にこやかに笑む細き指なり。

わが愛するは昵さはる温柔の黑き眼にして、
嬉しげに、優しげに、かはるがはる麗はしく、
閉づれば長く曳く睫の影、
見開いたる時の愛らしさ。
しかもわれ何故に愛するかを、
また何故に愛せられたるかを究めず、唯、
われは愛す。

われは榮譽を欲す、而も知らず、
果して之を欲するか否かを。
われは思考す、而して其思想を
定かならぬ恐懼の語に述ぶ。
ここのわが額の中に詩ありと感ずれど、
後後に生き殘るべき詩なるか、否か、知る由
なし、

唯之を敍ぶれば、心昂り、思樂し。
この聲抑ふ可からず。
われは詩人なるか、知らず、唯
われは歌ふ。

われは生きて萬物の中を行く。
善か、惡か、知らず、
そは屢屢萬物に昵さはれ、

また屢屢傷つけらるればなり。
われは愛す、冬も、夏も、絲杉も、薔薇も、
色青き大山、鈍色の名無の阜、
大海の轟、巴里の轟も。
善か、惡か、知らず、唯、
われは生き、われは行き、われは萬物を愛す。

われまた男女の間を行く。

額の下に、眼の中に、その魂を見てあれば、
巣立に散り行くおもしろさ。
世は影の鳥、火の鳥の飛び去る如く、
われ高山に昇りて、その過ぐるを眺む……
男はわれを害し、女はただ泣けども、
われはその男女を愛す。
われは生きたり。

——かくて、われは死なむ。後にか、遙後にか、
はた今直にか、
知らず、
けだし、わが行く處は、
あなたの、あなたの知らぬ國、
勇んで窓を飛び出づる鳥の如く、
あなたの、あなたの知らぬ國へ行きて
神の光に甦へらむ。否、

知らず。

或はわが行きて長久の眠に朽ち果つる所
は、
地下の數尺、
草木も、天も、懷かしきかの眼もあらぬ
忌はしき闇の世界か。
しかはあれど、われは命の熱き味を知る。

このわが小さき瞳にも
ただ稻妻の束の間に
久遠にわたる光明は映りたらずや、
われも亦聖なる宴に列りて、わが歡樂
は飲みほしぬ、
また何の望かあらむ。
われは生きたり。

—かくてわれは死なむ。

PAUL FORT

PONT AU CHANGE
CETTE FILLE, ELLE EST MORTE.....
L' ADIEU
BALLADE

兩替橋（ポントオ・シアンジュ）

ポント・オ・シアンジュ、花市の晩。風のまにまにふは、ふはと、夏水仙のにほひ、土の匂、あすはマリヤのお祭の宵宮にあたる賑やかさ。西の雲間に、河岸並に、金の入日がぱつとして、群集の上に、淡紅の光の波のてりかへし。シァアトレエの廣場には、人の出さかり、馬

車が跳れば、電車が滑る。辻の庭から打水の繁吹の霧がたちのぼり、風情くははるサンジァック、塔の姿が見榮する……風のまにまに、ふはふはと、夏水仙の匂、土の匂……その風薫る橋の上、ゆきつ、もどりつ、人波のなかに交つて見てゐると、撫子の花、薔薇の花、欄干に溢れ、人道のそこまで、瀧と溢れ出る。花はゆかしや、行く人の裾に卷きつく、足へも

絡む、道ゆく車の輪に絡む。

角のパレエの大時鐘、七時を打つた——都の上に、金無垢の湖水と見える西の空、雲重つてごことなく、雷のけしきの東の空。風の飜が蒸暑く、呼吸の出入も苦しいと……

ひとしほマノンの戀しさに、ほつと溜息二

度ついた。……風の飜が蒸暑く、踏まれた花の香が高い……見渡せば、入日華やぐポン・ヌウフ、橋の眼鏡の下を行く濃い紫の水の色、みるに心が結ぼれて——えい、かうまでも思ふのに、さても情ないマノンよと、恨む途端に、ごろ、ごろ、ごろ、遠くで雷が鳴りだして、風の飜が蒸暑い。

植木鉢、草花、花束、植木棚、その間を靜かに流れるは、艶消の金の光を映しつつ、入日の運を悲むで、西へ伴ふセエヌ川、紫色の波長く恨をひいてこの流、手摺から散る花びらをいづこの岸へ寄せるやら。夕日は低く惱ましく、わかれの光悲しげに、河岸を左右のセエヌ川、川一杯を抱きしめて、咽むで搖る漣に熱い動悸を見せてゐる。……われもあ

まりの悲しさに、河岸の手摺に身をもたせたが、……花のかをりの夜の風、かへつて、ふさぎの種となり、つれないマノンを思ひだす。

あれ、ルウヴルの屋根の上、望の色の天の奥、ちろり、ちろりとひとつ星。おお、それ、マノンの歌にも聞いた。あれこそ、なさけのひと

つ星、空には、めうごも、こひびとも、心變りのないものか。」涙ながらに、金星を仰いで見れば、寶石の光のやうにきらめくが、憎らしいぞや、雲めが隱す、折角樂しい昨日は夢、せつない今日が現かと、つい煩惱も生じるが、世の戀人の身の上を何で雲めが思ふであらう。……もう、もう、そんな愚痴はやめ。——星も出よ、あらしも吹けよ、唯ひとすぢに、あの人

を思ふわが身には、どうでもよい。ある日マノンの歌ふには「移ろひやすい人心」そこでこちらも早速に、「君が色香もかんばせも」と鸚鵡返をしておいた。したが、あらしに打たれる花は、さぞ色褪せることだらう。……ぴかりと稻妻、はたたがみ、はつことばかりに氣がついた。

雨こそは、さても眞面目に、しつとりと人の氣分を落ちつかせ、石の心も浮きあげて冷たい光を投げかける。雨よ、この燃える思を冷やかに、亂れた胸を平らかに、このさし伸べた熱の手を涼しいやうにひやせかし。

おお、ぽつりぽつりやつて來た。……ああ、さつとひと雨……おや、もう月の出か。さては村雨の通つたのか。何となく明るいぞ。風の

まにまに、ふはふはと、撫子が匂ふ、夏水仙が匂ふ、薔薇が匂ふ、土が匂ふ。ルウヴル宮の屋根の上、なさけの星も傾いた。どれこの花束を買ひませう。おやおや氣でもちがつたか。そして心で笑ひつつ、薔薇の花束ひと抱、さきの口説もどこへやら、マノンのとこへ飛んで行く。

このをとめ

このをとめ、みまかりぬ、みまかりぬ、戀やみに。

ひとこれを葬りぬ、葬りぬ、あけがたに。

寂しくも唯ひとり、唯ひとり、きのままに、

棺のうち、唯ひとり、唯ひとり、のこしきて、

朝まだき、はなやかに、はなやかに、打つれて、

歌ふやう「時くれば、時くれば、ゆくみちぞ、

このをとめ、みまかりぬ、みまかりぬ、戀やみに」

かくてみな、けふもまた、けふもまた、野に出でぬ。

別離

せめてなごりのくちづけを濱へ出てみて送りませう。

いや、いや濱風、むかひ風、くちづけなんぞは吹きはらふ。

せめてわかれのしるしにと、この手拭をふりませう。

いや、いや濱風、むかひ風、手拭なんぞは飛んでしまふ。

せめて船出のその日には、涙ながして、送りませう。

いや、いや濱風、むかひ風、涙なんぞは干てしまふ。

えゝ、そんなら、いつも、いつまでも、思ひつづけて忘れまい。

ああ、それでこそお前だ、それでこそお前だ。

小歌

木立生ひ繁げる阜は、岸まで下りて、静かな水の中へつづく。薄暗い水の半は緑葉を、まつ青なまたの半は中空の雲をゆすぶる。

ここを通るは白雲の眞珠船、ついそのさきを滑りゆく水枝の筏……それ、眼の下に

堰の波、渦巻く靄のその中に、船も筏もあらばこそ。

われらが夢の姿かな。船は碎け、筏は崩れ、帆はあれど、めあてなく、波のまにまに。影の夢、青い夢、堰に裂け、波に散り、あごもない。

木立生ひ繁る阜は岸までつづく。向の岸の野原には今一面の花ざかり、中空の雲一ばいに白い光が掠めゆく……ああ、また別の影が來て、うつるかと見て消えるのか。

GUY CHARLES CROS

LA FENÊTRE

DÉLIRE

窓にもたれて

夜の紫の肩巾が
ふはりと地の肩の上に滑り落ちる
黄昏の窓にもたれて
今夜もまた空の悲劇を見はじめると、
雲はけふどこへいつたか、
いつもの逢引にかげもみせない。

西方一面に和ぎわたり、
光いつとなく白んで薄れて、
さながら、あまりに脆く美しい花束が
ちよいとのことにこぼれ散るやうだ。
夕影はいま山あひの虚の窪まで及んだが、
むかふの阜は入日のはての光を浴びて、
温柔の氣、水の如く中天に流れ跳つて、

一分一分の嬌めいて滑りゆくには、
つい、ぼんやりと、恍惚して了ふこころを、
これではならぬと、やつとこさ、
胸の思をなだめて眠かす、
心いきの小歌もくひとめた。
おや、うしろの方でらんぷがつく。
見よ、大空の奥深く、

千萬年も倦んぜずに、また、こよひ、
ちろり、ちろりと見える、聞える、
色の數々顫はせた、星の光の節まはし。

譫語

新しき美をわれは求める。
墓の上に遠慮無く舞踏するわれらだ。
爾等はモツァルト、ラファエルを守れ、
ベエトオゼン、シェイクスピア、マルク・オオ
レルを守れ、
われらは敢て異端の道を擇ぶ。

爾等の旌に敬禮しようや。
もし古の俊傑が復活するとならば、
このわが身中に、このわが血液に甦るべし。
爾等の見窄らしい繪馬の前に、
なんでこの身が、額づき祈らう。
むしろ、われは大風の中を濶歩して、
轟き騷ぐ胸を勵まし、
鵜鳴く葡萄園に導きたい。

沖の汐風に胸ひらくとも、
葡萄の酒に醉はうとも、何のその。
古書に傍註して之を汚す者よ、
額づき拜せ、われは神だ。

REMY DE GOURMONT

LES CHEUVEUX

LA NEIGE

LE HOUX

LITANIES DES ROSES

FLEURS DE JADIS

DITS DES ARBRES

髪

シモオヌよ、そなたの髪の毛の森には
よほどの不思議が籠つてゐる。

そなたは乾草の匂がする牛なぞの
ながく眠てゐた石の匂がする。
鞣の匂がするかと思へば

麥を箕に煽りわける時の匂もする。
また森の匂もするやうだ。
朝配ばつて來る麵包の匂もする。
廢園の石垣にそつて亂れ咲く
草花の匂もする。
懸鉤子の匂もするやうだし、
雨に洗はれた蔦の匂もする。
日が暮れてから苅りとつた

羊齒の匂、蘭の匂がする。
柊の匂、苔の匂、
垣根の下に實が割れた朽葉色の
萎れた雜草の匂がする。
蕁麻の匂、金雀花の匂がして、
和蘭陀げんげの匂もして、乳の匂がする。
黑種草の匂、茴香の匂、
胡桃の匂がする、またよく熟れて

摘みとつた果物の匂がする。
柳や菩提樹が瓣の多い
花を咲かせるときの匂がする。
蜜蜂の匂もする。牧の草原に
さまよふ生物の匂がする。
土の匂、川の匂、
愛の匂、火の匂がする。

シモオヌよ、そなたの髪の毛の森には
よほどの不思議か籠つてゐる。

雪

シモオヌよ、雪はそなたの頸のやうに白い、
シモオヌよ、雪はそなたの膝のやうに白い。
シモオヌよ、そなたの手は雪のやうに冷たい、
シモオヌよ、そなたの心は雪のやうに冷た

い。

雪は火のくちづけにふれて溶ける、
そなたの心はわかれのくちづけに溶ける。

雪は松が枝の上につもつて悲しい、
そなたの額は栗色の髪の下に悲しい。

シモオヌよ、雪はそなたの妹、中庭に眠てゐる。

シモオヌよ、われはそなたを雪と戀よと思つてゐる。

柊冬青

シモオヌよ、柊冬青に日が照つて、
四月は遊にやつて來た。

肩の籠からあふれる花を、
茨に柳に橡の樹に、

小川や溝や淺沼の
汀の草にもわけてやる。

水の上には黄水仙、
森のはづれへ日々花、

素足もかまはず踏み込んで、
棘のひかげへすみれぐさ、

原一面に雛菊や
鈴を頸環の櫻草、

森の木の間にきみかげ草、
その細路へおきなぐさ、

人家の軒へあやめぐさ、
さてシモオヌよ、わが庭の

春の花には亭環、遊蝶花、
唐水仙、匂の高い阿羅世伊止字。

薔薇連禱

偽善の花よ、
無言の花よ。

銅色の薔薇の花、人間の歡よりもなほ賴み
難い銅色の薔薇の花、おまへの偽多い匂を
移しておくれ、偽善の花よ、無言の花よ。

うかれ女のやうに化粧した薔薇の花、遊女
の心を有つた薔薇の花、綺麗に顏を塗つた
薔薇の花、情深さうな容子をしておみせ、偽
善の花よ、無言の花よ。

あごけ無い頰の薔薇の花、末は變心をしさ
うな少女、あごけ無い頰に無邪氣な紅い色

をみせた薔薇の花、ぱつちりした眼の罠を
お張り、僞善の花よ、無言の花よ。

眼の黑い薔薇の花、おまへの死の鏡のやう
な眼の黑い薔薇の花、不思議といふ事を思
はせておくれ、僞善の花よ、無言の花よ。

純金色の薔薇の花、理想の寶函ともいふべ

き純金色の薔薇の花、おまへのお腹の鑰を
おくれ、僞善の花よ、無言の花よ。

銀色の薔薇の花、人間の夢の香爐にも譬ふ
べき薔薇の花、吾等の心臟を取つて煙にし
てお了ひ、僞善の花よ、無言の花よ。

女同志の愛を思はせる眼付の薔薇の花よ、

百合の花よりも白くて、女同志の愛を思はせる眼付の薔薇の花、處女に見せかけてゐるおまへの匂をおくれ、僞善の花よ、無言の花よ。

茜さす額の薔薇の花、蔑まれた女の憤怒、茜さす額の薔薇の花、おまへの驕慢の秘密をお話し、僞善の花よ、無言の花よ。

黄ばむだ象牙の額の薔薇の花、自分で自分を愛してゐる黄ばむだ象牙の額の薔薇の花、處女の夜の秘密をお話し、僞善の花よ、無言の花よ。

血汐の色の唇の薔薇の花、肉を食ふ血汐の色の唇の薔薇の花、おまへに血を所望され

たら、はて何こしよう、さあ、お飲み、僞善の花よ、無言の花よ。

硫黄の色の薔薇の花、煩悩の地獄ともいふべき硫黄の色の薔薇の花、魂となり焔となり、おまへが上に舞つてゐるその薪に火をおつけ、僞善の花よ、無言の花よ。

桃の實の色の薔薇の花、紅粉の粧でつるつるした果物のやうな、桃の實の色の薔薇の花、いかにも狡さうな薔薇の花、吾等の齒に毒をお塗り、僞善の花よ、無言の花よ。

肉色の薔薇の花、慈悲の女神のやうに肉色の薔薇の花、若若してゐて味の無いおまへの肌の悲みに、この口を觸らせておくれ、僞

善の花よ、無言の花よ。

葡萄のやうな薔薇の花、窖と酒室の花である葡萄のやうな薔薇の色、狂氣の亞爾箇保兒がおまへの息に跳ねてゐる、愛の狂亂を吹つかけておくれ、僞善の花よ、無言の花よ。

菫色の薔薇の花、曲けた小娘の淑やかさが

見える黃色の薔薇の花、おまへの眼は他よりも大きい、僞善の花よ、無言の花よ。

淡紅色の薔薇の花、亂心地の少女にみたてる淡紅色の薔薇の花、綿紗の袍とも、天の使ともみえる拵へもののその翼を廣げてごらん、僞善の花よ、無言の花よ。

紙細工の薔薇の花、この世にあるまじき美を巧にも作り上げた紙細工の薔薇の花、もしや本當の花でないかえ、僞善の花よ、無言の花よ。

曙色の薔薇の花、「時」の色「無」の色を浮べて、獅身女面獸の微笑を思はせる暗色の薔薇の花、虚無に向つて開いた笑顔、その嘘つきの所が今に好きになりさうだ、僞善の花よ、無言の花よ。

紫陽花色の薔薇の花、品の良い、心の平凡な樂ごもいふべく、新基督教風の薔薇の花、紫陽花色の薔薇の花、おまへを見るとイエスさまも厭になる、僞善の花よ、無言の花よ。

佛桑花色の薔薇の花、優しくも色の褪めたところが返咲の女の不思議な愛のやうな佛桑花花の薔薇の花、おまへの刺には斑があつて、おまへの爪は隱れてゐる、その天鵞絨の足先よ、僞善の花よ、無言の花よ。

亞麻色の薔薇の花、華車な撫肩にひつかけた格魯謨色の輕い塵除のやうな亞麻色の

牡よりも强い牝と見える、僞善の花よ、無言の花よ。

香橙色の薔薇の花、物語に傳はつた威尼知亞女、姫御前よ、妃よ、香橙色の薔薇の花、おまへの葉陰の綾絹に、虎の顎が眠てゐるやうだ、僞善の花よ、無言の花よ。

杏色の薔薇の花、おまへの愛はのろい火で
温まる杏色の薔薇の花よ、菓子をころころ
煮てゐる火皿がおまへの心だ、僞善の花よ、
無言の花よ。

盃形の薔薇の花、口をつけて飲みにかか
ると、齒の根が浮出す盃形の薔薇の花、嚙ま
れて莞爾、吸はれて泣きだす、僞善の花よ、無

言の花よ。

眞白な薔薇の花、乳色で、無邪氣で眞白な
薔薇の花、あまりの潔白には人も驚く、僞善
の花よ、無言の花よ。

藁色の薔薇の花、稜鏡の生硬な色にたち
雜つた黄ばむだ金剛石のやうに藁色の薔

薇の花、扇のかげで、心と心とをひしと合せて、芒の匂をかいでゐる僞善の花よ、無言の花よ。

麥色の薔薇の花、括の弛むだ重い小束の麥色の薔薇の花、柔くなりさうでもあり、硬くもなりたさうである、僞善の花よ、無言の花よ。

藤色の薔薇の花、決着の悪い藤色の薔薇の花、波にあたつて枯れ凋むだが、その酸化した肌をばなるたけ高く賣うとしてゐる、僞善の花よ、無言の花よ。

深紅の色の薔薇の花、秋の夕日の豪奢や

かさを思はせる深紅の色の薔薇の花、また世心のつかないのに欲を貪る者の爲添伏をして身を任す貴い供物、僞善の花よ、無言の花よ。

大理石色の薔薇の花、紅く、また淡紅に熟して今にも溶けさうな大理石色の薔薇の花、おまへは極内證で花瓣の裏をみせてくれる、僞善の花よ、無言の花よ。

唐金色の薔薇の花、天日に乾いた揑粉、唐金色の薔薇の花、どんなに利れる投槍も、おまへの肌に當つては齒も鈍る、僞善の花よ、無言の花よ。

焰の色の薔薇の花、强情な肉を溶かす特

製の坩堝、焔の色の薔薇の花、老耄した黨員の用心、僞善の花よ、無言の花よ。

肉色の薔薇の花、さも丈夫らしい、間の抜けた薔薇の花、肉色の薔薇の花、おまへは、わたしたちに紅い弱い葡萄酒を注けて誘惑する、僞善の花よ、無言の花よ。

玉蟲染の天鵞絨のやうな薔薇の花、紅と黄の品格があつて、人の長たる雅致がある玉蟲染の天鵞絨のやうな薔薇の花、成上の姫たちが着る胴着、似而非道德家もはおりさうな衣服、僞善の花よ、無言の花よ。

櫻綾子のやうな薔薇の花、勝ち誇つた唇の結構な氣の廣さ、櫻綾子のやうな薔薇の

花、光り輝くおまへの口は、わたしごもの肌の上、その迷景の赤い封印を押してくれる、僞善の花よ、無言の花よ。

乙女心の薔薇の花、ああ、まだ口もきかれぬぼんやりした薄紅い生娘、乙女心の薔薇の花、まだおまへには話がなからう、僞善の花よ、無言の花よ。

苺の色の薔薇の花、可笑しな罪の耻と赤面、苺の色の薔薇の花、おまへの上衣を、ひとが揉みくちやにした、僞善の花よ、無言の花よ。

夕暮色の薔薇の花、愁に半死んでゐる、噫たそがれ刻の霧、夕暮色の薔薇の花、ぐつたりした手に接吻しながら、おまへは戀死で

もしさうだ、僞善の花よ、無言の花よ。

水色の薔薇の花、虹色の薔薇の花、怪獸の眼に浮ぶあやしい色、水色の薔薇の花、おまへの瞼を少しおあげ、怪獸よ、おまへは面と向つて、ぢつと眼と眼と合せるのが恐いのか、僞善の花よ、無言の花よ。

草色の薔薇の花、海の色の薔薇の花、ああ海のあやしい妖女の臍、草色の薔薇の花、波に漂ふ不思議な珠玉、指が一寸觸ると、おまへは唯の水になつてしまふ、僞善の花よ、無言の花よ。

紅玉のやうな薔薇の花、顏の黑ずんだ額に咲く薔薇の花、紅玉のやうな薔薇の花、お

まへは帶の締緒の玉にすぎない、僞善の花よ、無言の花よ。

朱の色の薔薇の花、羊守る娘が、戀に惱むで畠に眠てゐる姿、羊牧はゆきずりに匂を吸ふ、山羊はおまへに觸つてゆく、僞善の花よ、無言の花よ。

墓場の薔薇の花、屍體から出た若い命、墓場の薔薇の花、おまへはいかにも可愛らしい、薄紅い、さうして美しい爛壞の薫神神しく、まるで生きてゐるやうだ、僞善の花よ、無言の花よ。

褐色の薔薇の花、陰欝な桃花心木の色、褐色の薔薇の花、免許の快樂、世智、用心、先見、お

まへは、ひとの惡さうな眼つきをしてゐる、
僞善の花よ、無言の花よ。

雛罌粟色の薔薇の花、雛形娘の飾紐、雛罌粟色の薔薇の花、小さい人形のやうに立派なので兄弟の玩弄になつてゐる、おまへは全體愚なのか、狡いのか、僞善の花よ、無言の花よ。

赤くてまた黑い薔薇の花、いやに衿つて物隱しする薔薇の花、赤くてまた黑い薔薇の花、おまへの矜りも、赤味も、道德が拵へる妥協の爲に白つちやけて了つた、僞善の花よ、無言の花よ。

鈴蘭のやうな薔薇の花、アカデエモスの

庭に咲く夾竹桃に絡むだ旋花、極樂の園にも亂れ咲くだらう、噫、鈴蘭のやうな薔薇の花、おまへは香も色もなく、洒落た心意氣も無い、年端もゆかぬ花だ、僞善の花よ、無言の花よ。

罌粟色の薔薇の花、藥局の花、あやしい媚藥を呑むだ時の夢心地、贋の方士が被る頭巾のやうな薄紅い花、罌粟色の薔薇の花、馬鹿者どもの手がおまへの下衣の襞に觸つて顫へることもある、僞善の花よ、無言の花よ。

瓦色の薔薇の花、煙のやうな道德の鼠繪具、瓦色の薔薇の花、おまへは寂しさうな古びた床机に這ひあがつて、咲き亂れてゐる、

夕方の薔薇の花、僞善の花よ、無言の花よ。

牡丹色の薔薇の花、仰山に植本のある花園の愼ましやかな誇、牡丹色の薔薇の花、風がおまへの瓣を飜るのは、ほんの偶然であるのだが、それでもおまへは不滿でないらしい、僞善の花よ、無言の花よ。

雪のやうな薔薇の花、雪の色、白鳥の羽の色、雪のやうな薔薇の花、おまへは雪の脆いことを知つてゐるから、よほど立派な者のほかには、その白鳥の羽を開いてみせない、僞善の花よ、無言の花よ。

玻璃色の薔薇の花、草間に迸る岩清水の色、玻璃色の薔薇の花、おまへの眼を愛した

ばかりで、ヒュラスは死んだ、僞善の花よ、無言の花よ。

黄玉色の薔薇の花、忘れられてゆく傳説の姫君、黄玉色の薔薇の花、おまへの城塞は旅館となり、おまへの本丸は滅んでゆく、おまへの白い手は曖昧な手振をする、僞善の花よ、無言の花よ。

紅玉色の薔薇の花、轎で練つてゆく印度の姫君、紅玉色の薔薇の花、けだしアケディセリルの妹君であらう、噫、衰殘の妹君よ、その血僅に皮に流れてゐる、僞善の花よ、無言の花よ。

莧のやうに紫ばむだ薔薇の花、賢明はフ

ロンド黨の姫君の如く、優雅はプレシウズ
連の女王とも謂つべき莧のやうに紫ばむ
だ薔薇の花、美しい歌を好む姫君、姫が寢室
の帷の上に、卽興の戀歌を、ひとが置いてゆ
く、僞善の花よ、無言の花よ、

蛋白石色の薔薇の花、後宮の香烟につつ
まれて眠む土耳古の皇后、蛋白石色の薔薇

の花、絶間無い撫さすりの疲、おまへの心は
したたかに滿足した惡德の深い安心を知
つてゐる、僞善の花よ、無言の花よ。

紫水晶色の薔薇の花、曉方の星、司敎のや
うな優しさ、紫水晶色の薔薇の花、信心深い
柔かな胸の上におまへは寢てゐる、おまへ
は瑪利亞樣に捧げた寶石だ、噫寶藏の珠玉、

僞善の花よ、無言の花よ。

君牧師の衣の色、濃紅色の薔薇の花、羅馬公教會の血の色の薔薇の花、濃紅色の薔薇の花、おまへは愛人の大きな眼を思ひださせる、おまへを襪紐の結目に差すものは一人ばかりではあるまい、僞善の花よ、無言の花よ。

羅馬法皇のやうな薔薇の花、世界を祝福する御手から播き散らし給ふ薔薇の花、羅馬法皇のやうな薔薇の花、その金色の心は銅づくり、その空なる輪の上に、露と結ぶ涙は基督の御歎き、僞善の花よ、無言の花よ、僞善の花よ、無言の花よ。

僞善の花よ、
無言の花よ。

むかしの花

ごんなに立派な心よりも、おまへたちの方がわたしは好だ、滅んだ心よ、むかしの心よ。

×

長壽花、金髪のをとめ、幾人もの清い睫はこれで出來る。

東洋の水仙花、實のならぬ花、道で無い花。

黄金色の金盞花、男の夢に通つてこれと契る魑魅のもの凄い艶やかさ、これはまた惑星にもみえる、或は悲しい「夢」の愁の髪に燃える火。

長壽花、水仙花、金盞花、こんなに明るい色

の髪の毛よりも、おまへたちの方が、わたしは好だ、滅んだ花よ、むかしの花よ。

×

白百合、處女で死んだ者の、さまよふ魂。

紅百合、身の潔白を失して赤面した花、世心づいた花。

鳶尾草の花、清淨無垢の腕の上に透いて
見える脈管の薄い水色、肌身の微笑、新しい
大空の清らかさ、朝空のふと映た細流。

白百合、紅百合、鳶尾草の花、信賴心の足り
ない若いものたちよりも、おまへたちの方
がわたしは好だ、滅んだ花よ、むかしの花よ。

×

花薄荷、燃えたつ草叢、火焔の鬣、火蛇のや
うなこの花の魂は黑い涙となつて鈍染む
である。

双鸞菊、魚鱗の兜を戴き、鳥の羽根の飾を
挿した女軍の勇者。

風鈴草、色ぼい音の鈴、春ここにちりりん
と鳴る、榛の樹が作る筋違骨の下に蹲る色
よい少女。

花薄荷、双鸞菊、風鈴草、毒の薄い、浮れやう
の足りないほかの花よりも、おまへたちの
方が、わたしは好だ。滅んだ花よ、むかしの花
よ。

×

牡丹、愛嬌たつぷりの花娘、尤も品の無い
味もない。

匂阿羅世伊止宇、眼に萎えた愁のあるむ
すめ。

苧環、成人びてゐないのが身上の女學生、

短い袴、纖い脚、燕の羽根のやうに動く腕。

牡丹、句阿羅世伊止宇、苧環の花、女ざかりの姿よりも、おまへたちの方がわたしは好だ。滅んだ花よ、むかしの花よ。

×

水剪紅羅、すこし不格好だが、白鳥の頸のやうにむくむくした毬毛がある。

龍膽、太陽の忠やかな戀人。

赤熊百合、王の御座所の天幕の屋根飾、夢を鏤めた笏、埃及王の窮屈な禮服を無理に被せられた古風な女王。

水剪紅羅、龍膽、赤熊百合、本物の女性美よ

りも、おまへたちの方が、わたしは好だ。滅ん
だ花よ、むかしの花よ。

×

櫻草、はつ春の姉娘。

毛茛、貧しいうかれ女の金貨。

鈴蘭、おめかしの好な女、白い喉を見せて

歩く蓮葉者の故意こらしいあどけなさ、丸
裸の罔象女。

櫻草、毛茛、鈴蘭、愼の足りない接吻よりも、
おまへたちの方が、わたしは好だ。滅んだ花
よ、むかしの花よ。

×

茴香、愛の女神の青雲の髪。

野罌粟、戀人に嚙まれて血を鈍染ました
唇。

黄蜀葵、士古耳皇帝鍾愛の花、麻色に曇つ
た眼、肌理こまかな婀娜もの――おまへの胸
から好い香がする、潔白の氣は露ほどもな
い香がする。

茴香、野罌粟、黄蜀葵、色色と物言ひかける
よその小花よりも、おまへたちの方がわた
しは好だ。滅んだ花よ、むかしの花よ。

×

山百合のマルタゴン、何百となく頭を上
げて、強い薫を放つ怪物、淺藍色の多頭の大
蛇。

山百合のマルタゴン、葡萄色の頭巾を被てゐる。

山百合のマルタゴン、黄いろい眼をしたマルタゴン、東羅馬の百合の花、澆季皇帝の愛玩、聖像の香。

マルタゴン、鈴なり花のマルタゴン、名指してもいいが、ほかの怪物よりもおまへたちの方がわたしは好だ。滅んだ花よ、むかしの花よ。

×

猿猴草、さも毒がありさうな白い花。

翁草、吟味して雅びた物言ばかりなさる

マダアム・プレシウズ。

オンファロオド、人を蕩す明色の眼をした臍形の花、影を無言に映して見せる奥深い鏡。

猿猴草、翁草、オンファロオド、粉粧が足りない尋常の化生のものよりも、おまへたちの方がわたしは好だ。滅んだ花よ、むかしの花よ。

×

瑠璃草、アンゴラの生れか、手ざはりの快い、柔かい女猫。

紫羅欄花、帽子の帶の縁にさした人柄な前立。

罌粟の花、愛の疲の眠、片田舎の廢園。蓬生の中に、ぐつすり眠るまろ寢姿——靴の音にも眼が醒めぬ。

瑠璃草、紫羅欄花、罌粟の花、どんなに嫖緻の好い子よりも、おまへたちの方が、わたしは好だ。滅んだ花よ、むかしの花よ。

×

矢車草、まるで火の車。

思草、わたしはおまへを思ひだす——めんとおまへを見るときに。

白粉花、夜中に表を叩くから、雨戸を明けてふと見れば、墓場の上の狐火か、暗闇のなかにおまへの眼が光る。噫、おしろい、おしろ

い、汚れた夜の白粉花。

矢車草、思草、白粉花、生の眞の美人よりも
おまへの方がわたしは好だ。滅んだ花よ、む
かしの花よ。

雛菊、指で隠したおまへのその眼のしを

らしさ。

釣舟草、不謹慎の女である、秋波をする、科
をする。

蒐の花、男なんぞは物ともしない女の帽
子の羽根、口元も腰元も溶けるやうだ、おま
への蜜の湖に若い男が溺れ死ぬ。

雛菊、釣舟草、蒐の花、もつと眞劍の迷はしよりも、おまへたちの方が、わたしは好だ。滅んだ花よ、むかしの花よ。

×

忍冬、うかれて歩く女。

素馨、ゆきずりに袖ふれる女。

濱蒿苣、すました女、おまへには道義の匂がする、秤にかけた接吻の智慧もある、樫の簞笥に下着が十二枚、乙な容子の濱蒿苣、しかも優しい濱蒿苣。

忍冬、素馨、濱蒿苣、迷はしの足りないほかの花よりも、おまへたちの方が、わたしは好だ。滅んだ花よ、むかしの花よ。

×

蛇苺、蘭引で拵へあげた女。
芍藥、腕套に包んだ手で、頰に皮肉を播いてゐる。

雪の下、堅い心も突きとほす執念深い愛、
石に立つ矢、どんなに暗い鐵柵の網の中へも入る微笑。

蛇苺、芍藥、雪の下、もつと穩しい隱立よりも、おまへたちの方がわたしは好だ。滅んだ花よ、むかしの花よ。

×

ブラテエルといふ花は、所帶染みた世話女房。

モレエヌはラブレエのやうに笑ひのめす花。

水蓼は無情の美人、燒木だ、蘆の簫だ、眼にばかり心が出てゐて、胸は空。

ブラテエル、モレエヌ、水蓼、もつと媚めかしい姿よりも、おまへたちの方が、わたしは

好だ。滅んだ花よ、むかしの花よ。

×

亞米利加の薄荷の花、愛の衰にふりかける胡椒。

鐵線蓮、人の魂に絡む蛇。

留紅草、樽形の花、その底にダナウスの娘

たちが落ちてゐさうな花、人間の弱い心臓の血を皆闕はずに吸ひこむため、おまへの唇には痕がある。

亞米利加の薄荷、鐵線蓮、留紅草、もつと優しい鳩のやうな肉よりも、おまへたちの方がわたしは好だ。滅んだ花よ、むかしの花よ。

×

「十一時の女」といふ花は白い日傘ですらりと立つてゐる。

芥菜の花、おまへの優しい心はみんな歌になつて、なくなつて了ふ。

木犀、可愛い從姉妹の匂、子供の戀、眞味を飾る微笑。

「十一時の女」芥菜、木犀の花、僞のもつと少ない手足よりも、おまへたちの方がわたしは好だ。滅んだ花よ、むかしの花よ。

×

「聖母の手套」即ち實芰答利斯の花、信心の諸人みなこれに接吻する。

刺罌粟、すきな手の甲の靨。

母子草、すいた人の指にはめた脆い蛋白花、寢室でもつて、月を映してみるつもりか。

「聖母の手套」刺罌粟、母子草、どんなに眞白な手よりも、おまへたちの方が、わたしは好だ。滅んだ花よ、むかしの花よ。

×

杜若、悲しい松明の強い焔。

菖蒲、女丈夫の血に染まつた凄い短刀。

伊吹虎尾、振りかざす手の怒、空になつた心臓にしがみつく蝮、自害した人。

杜若、菖蒲、伊吹虎尾、どんなに恐しい娘よ

りも、おまへたちの方がわたしは好だ。滅んだ花よ、むかしの花よ。

×

犬芥、苦痛にほほゑむ尼僧、隱れたる殉教者の光。

「約百の涙」といふ川穀、蒼ざめた瞼の下の涙、暗い頰の上の悲しい眞珠。

紫苑、基督の御最後のおん眼を象るせつない花。

犬芥、「約百の涙」紫苑、ごんなに血の滴れる心よりも、おまへたちの方がわたしは好だ。滅んだ花よ、むかしの花よ。

立木の物語

いろいろの立木よ、押籠になつた心よ。
まづその樹皮を窘むで、そろそろ、おまへたちの秘密を汚してみよう、傷ましいいろいろの心よ。
わたしの悲しい心の悦。

×

樫の木よ、滅んだ神神に向つて輝きわたる榮光の波、おそろしく大きな足の夷、光と血の岩。

おまへの綠の髪の毛の波は、貝の音が斧の刻を告せると、眞紅に染まる。すぎ來しかたを憶ひだして。

樫の木よ、憎の階、尊い神木、わたしの悲しい心の悅。

×

色白の腕を伸した椨の木よ、聖母瑪利亞、子持を歎き給ふ禮拜堂、二形の利末僧が重い足で踏み碎いた、あらずもがなの足臺、僧官濫賣の金を容れて、燒焦をこしらへた財囊、「愛」の神が、嘗てここに人間を愛してみたいと思つた虛の胎內。

おまへの臍の上に、銀の蛇の帶をきりり

とお締め、

とはいふものの、また可愛くもある椨の木、不思議の木、わたしの悲しい心の悦。

×

人間の罪をひとりに引受けた孤獨の老僧と見立てる楡の木よ、祈念を勤める楡の木、潮風はゴモラ人の涙より鹹い。

罪障深いおまへの肌の毛孔を海の風に

吹かせて、わたしどもの爲に苦むでおくれ。

鞭索の苦行に身を鍛へた楡の木よ、わたしの悲しい心の悦。

×

腰もあらはの栲よ、草叢から生へた汚れた夢のやうだ。生の無い影の中に咲きたいといふ狂氣の百合のやうでもある。

悪龍の眼もおまへの清い冷たい肌は通

されぬ。

椶よ、色蒼ざめた天竺の赤脚仙、えたいの知れぬ木、わたしの悲しい心の悅。

×

冷たい肌黑の胡桃の木よ、海草の髪を垂れ、くすんだ綠玉の飾をした女、空の草原の池に浸つて靑くなつた念珠、ぼんやりとした愛の咽首を締めてやらうとするばかり

の望、よく實を結び損ふ繖形花。

いやに冷つく繖形花、わたしはおまへの陰に寢て、自殺者の聲で眼が醒めた、

冷たい肌黑の胡桃の木よ、わたしの悲しい心の悅。

×

林檎の木よ、發情期の壓迫で、身の內が熱つて重くなつた爛醉、情の實の房、粒の熟し

た葡萄の實、寛むだ帶の金具、花を飾つた酒樽、葡萄色の蜂の飲水場、

さも樂しさうな林檎の木よ、昔はおまへの香をかいで悅むだこともある、その時おまへの幹へ、牛が鼻先を擦つてゐた。

花を飾つた酒樽、林檎の木よ、さも樂しさうな木、わたしの悲しい心の悅。

×

やつと灌木の高さしか無い柊よ、僞善の尻を刺す鑿、愛着の背を刻む鑿、鞭の柄、手燭の取手。

眼を赤くした柊よ、おまへの爪の下に迸る血でもつて兄弟の契を結ばせる藥が出來さうだ。

やつと灌木の高さしか無い柊よ、小さい剛手、わたしの悲しい心の悅。

×

篠懸の木よ、總大將が乘る親船の帆檣、遠い國の戀に向ふ孕むだ帆――男の篠懸は種子を風に播く石弩の如く、甲を通し腹を刺す――女の篠懸は始終束をばかり氣にして而て定業を瞑想する、さうして胚種の通りすがりに、おまへは之を髮に受けこめる、おまへは風と花とを遮らうとして張りつめた網だ。

獨ぼつちの男の木、唯、氣で感應する女の木、不可知の中で一緒になれ。

篠懸の一本木よ、片意地の戀人たちよ、わたしの悲しい心の悅。

×

白樺よ、蓬生の大海原に浴する女の身震風その薄色の髪に戯れるこ、おまへたちはなにか秘密を守らうとして象牙の戸のやうに脚を合せる、その時この白い女人柱の張切つた背の上に、神神の涙が墮ちて、突き刺された怪獣の痍口から、血の滴れるのがみえる。

それでも、背中や胸を拭いてやるまい、噫

木魂精よ、おまへは腕を伸して、勝ち誇る夢を捧げてゐる。

名も知られずに悲しげな白樺、處女で通す健氣の木、わたしの悲しい心の悦

×

殯宮に通夜をしてゐるやうな赤楊よ、おまへの王様は崩御になつた、赤楊の民よ、靜かな水底に冠の光を探しても、夜の宴の歌

舞の響を求めても、詮ない事になつて了つた、赤楊の王様、今、禍の方士の鬚である藻草の下、深淵の底に眠つてゐられる、忘却の花は、その眼の窩を貫いて咲いてゐる。

だれかまだ手に力のある者がゐるならば、はやくその花を摘るがよからう。

諒闇の民、赤楊よ、涙に暮れる木、わたしの悲しい心の悦。

×

垂飾をつけた日傘、花楸樹よ、ジタナ少女の頸にある珊瑚玉、その頸飾と柔肌を巫山戯た雀が來て啄く。

その頸飾は二つある。雀は少女の肩に眠た。

ねんごろに客をもてなす花楸樹、小鳥が毎年當にする降誕祭の飾木よ、わたしの悲

しい心の悦。

×

戀人のやうに顔を赧める秋の櫻の木、その紅いのはおまへの枝にぶら下る心臓の血であらう、この間、通りすがりの人たちに實のおいしいのは食べられて、今は只情に脆い風の出來心を、紅らむだ葉に待つばかり。

ただ泣いておゐて、おまへの琥珀色の涙へ、わたしは指環の印を押してあげる、後の思出の種として。

秋の櫻の木、紅い木よ、親切な木、わたしの悲しい心の悦。

×

常世の生の常世のざざんざ、傷ましい松の木よ、おまへの歎は甲斐が無い、いくらお

まへが死たくても、宇宙の律が許すまい、獨ぼつちで生きてゆくのさ、おまへを厭がる森の中、おまへのふとい溜息を嘲つてゐる森の中で。

死んでゆく身は今ここに敬禮する。
傷ましい木よ、常世の生の常世のざざんざ。わたしの悲しい心の悅

×

刺槐よ、好い匂がして、ちくちく刺してくれるのが愛の戯なら、後生だ、わたしの兩眼を刳りぬいておくれ、さうしたら、おまへの爪の皮肉も見えなくなるだらう。

してまた漠たる撫さすりで、わたしを存分に裂いておくれ。

女の匂のする木よ、肉を食ふ木よ、わたしの悲しい心の悅

×

髪に微笑を含むで清い小川の岸に寄り
かかる少女子、金雀花、金髪の金雀花、色白の
金雀花、清淨な金雀花。
金髪の金雀花よ、夢ばかりみてゐる纖弱
い木、わたしの悲しい心の悅。

×

愁に沈む女よ、落葉樹よ、石垣の崩に寄り

かかる抛物線。
銀の蜘蛛の巣がおまへの耳に絲を張つ
た、おまへの胴中に這つてゐる甲蟲は涙の
雨に打たれて血を吐いた。
愁に沈む女よ、落葉松よ、わたしの悲しい
心の悅。

×

涙に暮れる枝垂柳よ、棄てられた女の亂

髪、心と世とを隔てる幕、おまへの愁のやうに輕い花を織り合せた縮緬。

涙に暮れる枝垂柳よ、おまへの髪を搔きあげて、そら御覽よ、あすこを通る人を、曙の阜に立つ人を、

すこしは駈引もありさうな戀人、しやれた心配もする柳の木よ、わたしの悲しい心の悅。

×

鼠色の白楊よ、罪ありさうに顫へてゐる、全體どんな打明話が、その蒼白い葉の上に書いであつたのだらう、ごういふ思出を恐れてゐるのだ、秋の小逕に棄てられた熱に惱むだ少女子よ。

おまへの妹は黃昏色の髪を垂れて、水のほとりに愁へてゐる、亂倫の交を敢てする

おまへたち、何ぞ願があるのかい、媒をして上げようか。

始終、心の安まらないおまへたちよ、わたしの悲しい心の悦。

×

張箍の女袴を穿いた官女よ、橡の木よ、三葉形の縫を置いて、鳥の羽根の飾をした上衣を曳ずる官女よ、大柄で權高で、無益の美

形。

おまへの指先から落ちる輕蔑には、大概の田舍者は殺されて了ふ、わたしならその手を挫いてやる、こちらさへ其氣になれば愛させてもみせる。

張箍の女袴を穿いた女、高慢の上衣を着た女、わたしの悲しい心の悦。

×

死より生れて、死の僧となつた水松の木よ、おまへの枝は骨だ。

つるつるした墓石の枕元にある免罪符をおもひだす永久の鎭魂歌。

わたしの爲に祈つてくれ、翁びた水松の木よ、憐愍深き木、わたしの悲しい心の悅。

×

御主の冠となつた荆棘の木よ、血塗の王の額に嵌めた見窄らしい冠。

憐愍の房の血に赤く染つた尊い荆棘。

愛の荆棘よ、末期の苦の時、この罪ある心の中にその針を突き通し給へ。

敬愛すべき荆棘の木、わたしの悲しい心の悅。

牧羊神 終

跋

上田敏先生の永逝せられてより四週年、恰もその忌日に前後して遺稿の一部である詩集「牧羊神」を上梓することとなつた。前に刊行せられた譯詩集「海潮音」、未定稿「神曲」に併せて、詩に心を寄せられた先生の生涯を記念するものはこの詩集である。先生の教を受けた者の一人として、分外にも跋文を書くことを許された予は、明治詩壇のオリンパスに立つやうな畏怖の情を感じ、またこの光榮に對する責任を思ふ。

詩壇に於ける上田先生の地位を論ずる者は必ずその「海潮音」を以て代表作とし、象徴派の詩風を開かれたことを以て唯一の功績と考へるやうである。これは正しい見方ではあるが、同時に說いて盡さざる趣がないであらうか。この詩集に收められた創作の詩はいづれも先生の所謂象徴詩の部類に屬すべきものではない。「海潮音」の序文にも「素性の然らしむる所か、譯者の同情は寧ろ高蹈派の上にあり、はたまたダンヌンチオ、オオバネルの詩に注けり」とあるやうに、先生の詩想は、源を希臘羅甸の文學に發し、文藝復興期を經て近代

に流れる大雅の一脈であると共に、深くこの日本の風土文明に根を下したものであることを忘れてはならぬ。驅使縱横を極むる騷章麗句の間に卒然として身に沁みわたる古歌小唄、或は謠曲長唄などの遺韻を耳にするかと思へば、調は一轉してひろく舒び、ゆるやかに廣ごり、遠くレスボスの松風濤聲、或はシチリヤの原に眞晝の靜寂を破つて鳴響く牧童の笛の音に溶け入るやうなところがある。先生は詩に依つてその豐かな精神生活を披瀝し、これに適當な表現を與へようとせられた。先生の詩はその思想感情から生れた身振りである。長篇「牧羊神」には先生の人生觀を示して終始愛讀せられたモリス・

マアテルリンクの思想にも相通ふ點があり、「蹈繪」には、天草は農人、五島には勇魚(いさな)とる子の信仰に殉ずる敢行決意の精神を讃へて、つねづね尊敬せられたロバアト・ブラウニングの詩風に呼應する所がある。途のはづれにふと聽いたちやるめらの音にも、有爲の奥山道遠く、夢は雲居に身は浮世なる悶を感じ、汽車の窓よりかりそめに見る村童にさへ、產土(うぶすな)の愛に絶えずして思はず「萬歲」と叫ぶ。これらは、ただ象徴詩と呼ぶには餘りに廣く、かつ自由である。國文學に類例のない完全な敍情詩、思想と言葉との見事な調和と言ふより外に名義の下しやうがない。先生の詩が不朽を豫想せしめるのも、

その理由のひとつはここにあると信ずる。

譯詩に就ては先生みづから「海潮音」の序文に述べられたことであるから、今改めて說く必要はあるまい。この詩集には「海潮音」のあとをうけて、近歐象徴詩人よりそれ以後の詩人の諸作を加へ、詩の內容と性質に從つて口語體の上にも新機軸を開かれた。先生の譯詩がいかに當代の詩壇に影響稗益したかといふことは、直接日本近代の詩篇に就て見れば分る。否、日本の詩は先生を失ひ、先生を尊敬しなくなつてから急に墮落したと言つても過言ではない。譯詩とは言ひながら、盡く譯者の個人性を帶びて、殆ど創作を見るやうなこれらの

詩を讀み、一面に於いて、かくまで他人の作に潛心味到せられたことを思へば、先生の詩に對する用意の尋常でなかつたことを悟り、また、わが古謠の研究をものるがせにせられなかつた事實と併せ考へて、「牧羊神」のやうな傑作の出たのは決して偶然でないことを知らなければならぬ。むかしピイザのカンポ・サントに移した聖地の土からは、色も香も美妙ではあるが、處のものとも外國のものとも定めることの出來ない不可思議なアネモネの花が咲いたといふ。先生の譯詩もこれに類するものではなからうか。先生にとつて聖地バレスティナとも言ふべきは佛蘭西であつた。先生の愛を傾倒せられたその

佛蘭西が戰亂の渦中に入つて、殊に旗色の思はしくなかつた頃、病床に地圖を展べて憂慮止む時なく、しかも猶、羅甸民族の必勝を聲言せられた時のおもかげが髣髴として眼頭を去らない。せめてはランスを回復し、シャトオ・ティエリイに凱歌を揚げた時まで生きてゐられたならば、どれほど愁眉をひらかれたであらうかと思へば、今この詩集を手にするだに胸ふさがるやうに感ずる。

晩年のある日、京都黑谷の坂を降りながら、みづから人の世の降り坂に立つと言はれたことがある。その後、年ならずして、北米ブルックリンの客舍に先生の訃を聽た時、哀愁の中に

も曩の言葉を思ひ出して、先生の思想行動に、いつも先のことを豫知するやうなところのあつたことを感じた。詩人は直覺する。先生は學者としては俊秀の士、批評家としては一代に卓越した學才を備へてゐられたけれども、猶その上に詩人であつたから、學問や批評では窺ふことの出來ない人生の機微に觸れ、どうかすると永遠の姿であらうかとも思はれる、熱望の時、幽玄の境にも出入せられたのである。かつてマシウ・アアノルドのことを述べ、「マシウ・アアノルドの論文はうまい、けれど、其論文は卽ち論文であるから或は亡びることもあらう。併し其詩は卽ち詩であるから何時までも傳はる」と

言はれたのを、そのままここに移して、追慕の言葉に代へ、また先生の詩を說明する言葉ともしよう。

大正九年初秋

竹友藻風

「牧羊神」の後に

文學博士上田敏氏の遺編のなかに、二つの詩集がある。「海潮音」と「牧羊神」と。

「海潮音」は、明治卅八年十月に初版を本郷書院から出した第一詩集である。それに由つて、日本の詩壇は深大の刺激を受けた。言ふ迄も無く、それは、「文選」が奈良朝の歌に影響し、「白氏文集」が平安朝の文學に影響したのと相似た意味で、明治大正の詩歌に顯著な滋味を寄せた。就中、明治晩期の詩壇の運動を回顧する人人にとつて、「海潮音」の名は忘れ難いものになつて居る。

しかるに、「牧羊神」は、上田博士の第二詩集として、

博士の歿後五年の今日、ここに漸く世に現れるのである。

初め、博士が、此集を編んで、手づから淨書されたのは、大正四年の冬であつたらしい。翌年の春には、書肆金尾文淵堂に出つて印刷に着手され、博士が歿せられた其年の初夏には、此集の内にあるメエテルリンクの「目つき」と云ふ詩までを、博士自身で校正されて居た。其處へ、前年からの宿痾が急激な變化を示して、全く一朝にして夢の如く世を去られた爲めた、此集の出版もまた頓挫したが、その以後、出版界の事情に由り、益々遲滯して今日に及んだのである。

「牧羊神」には、現代佛蘭西に於ける代表詩人の名篇をあまた移植されると共に、博士自身の創作である「牧羊

神」、「汽車に乘りて」、「ちやるめら」、「蹈繪」、「啄木」の五篇を卷頭に載せられた。これは先きの「海潮音」に於て認め難い異彩である。

上田博士の天性は、何事の上にも、其名の示す如く敏慧であつた。殊に東西の學問藝術に亘つて、他よりも早く、直覺的にその長短を識別し、その美なるものと善なるものとを簡拔して、豫言的に提唱されることが多かつた。「文學界」、「帝國文學」、「明星」、「藝苑」、「三田文學」、「太陽」、「藝文」等の諸雜誌に於ける述作や、京都帝國大學の講壇をはじめ、各所に於ける講演に由つて、博士に接觸した人人は、博士の豐富な學殖と、高雅な趣味と、透徹した見識と、横溢した才氣とに驚歎したのである。しか

も生の意欲の旺盛であつた博士は、教育と批評とを以て時代の指導者たるのみに滿足することが出來なかつた。博士の言葉を以てすれば「盛り上つて溢れ出る生の杯に飽迄も口を附け」たかつた。實に博士の生活の主要な目的は藝術に依る純粹創造にあつた。

博士は早く「みをつくし」一卷に於て散文の創作を示され、後に小說「渦卷」をも書かれたが、しばしば自分達にも語られた如く。博士の愛は特に詩歌に向つて傾倒し、詩の創作を以て生涯の事業の最上層に置かれて居た。歐洲の詩を常に飜譯されたのも、また我國の短歌及び詩に就て起つた種種の新運動に對して聲援を努められたのも、全く之がためであつた。不幸にも短命で終られた爲めに、

博士の事業のすべてが美くしい苗のままた止まつたのは、永久に酬いられない恨事であるが、唯だ、自分達は世の人人と共に、博士の留められた幾つかの遺篇に由つて、その僅かな生涯に於ける博士の多方面な活動を追憶し、博士の警策が幾多の青年を刺激しながら、祖國の文化に清新な示唆となりつつあることを想像して、博士の功德を感謝すると共に、博士の早世に對する悲痛を聊か慰めるのである。就中、この「牧羊神」を繙くときは、博士の志であつた詩の創作が、前の「海潮音」以上に飛躍を示して、彼れに於て病とした重厚沈鬱の趣に代へるに、暢明快豁の氣象を以てし、古代希臘の典雅に、拉典氣質の透徹と高華と自由とを加へた如き創新の詩風を建てられ、

その背に無限の幽愁を負ひながら、飽迄も人間の完成を肯定し追求する博士の思想の展開されたのを見ることが出來て、誰れも博士の最も精神的な自畫像に對する喜びを感じるのである。

曾て博士は、「飜譯も創作だ」と云ふことを唱へ出されたが、この言葉は博士の飜譯に於て確かに妥當して居る。博士の移植された詩は、之を原作と對照する時、外形の模寫で無くて、本質の共鳴であり、原作者の生活である と共に、譯者其人の生活である。早く「海潮音」の自序が暗示して居るやうに、博士が平生の自負も此處にあつたが、「牧羊神」に到つて、博士は、自作をも飜譯をも、明かに自家の創作として、その間に區別を立てられなかつ

た。

「牧羊神」は、博士を記念して、永くその遺芳を傳へるに違ひない。しかし、其れのみで此集の意義が盡きやうか。折折の詩壇の流行は如何にあらうとも、自分は、永久に詩壇の新人を鼓舞し、日本人の感情を優しく健かにする一つの泉源が、「海潮音」と「牧羊神」とを併せて、確かに上田博士の詩にあると思ふ。

此集の校正は、博士自身が校了された以外の部分を自分が引受けた。即ちエルハアレンの作である「都會」より以下は、すべて博士自筆の稿本に從つて、句讀點一つをも愼重にした積りであるが、若し誤植があるなら自分と

印刷所との過失である。

一九二〇年新秋

與謝野寛

大正九年十月一日印刷
大正九年十月五日發行

著作者　上田敏
東京市芝區白金三光町十三番地

編輯者　上田瑠璃子
東京市麹町區平河町五丁目二番地

發行者　金尾種次郎
京市神田區表神保町十九番地

印刷者　宮田龜六
東京市神田區西小川町二丁目六番地

印刷所　大成社

【牧羊神與附】
【金貳圓五拾錢】

著作權所有

發兌元　東京市麹町區平河町五丁目二番地
金尾文淵堂
特電活九段二九一番
對長電話九段一〇八五番
振替貯金東京三八一七番